兵庫県文化財調査報告　第261冊
洲本市文化財調査報告　第10冊

中津原遺跡

基盤整備促進事業（一般型）下内膳地区埋蔵文化財発掘調査報告

2003年3月

兵庫県教育委員会
洲本市教育委員会

中津原集落の想定復元
イラスト 小東憲朗

中津原遺跡

基盤整備促進事業(一般型)下内膳地区埋蔵文化財発掘調査報告

遺跡遠景（東から、空中写真）

遺跡遠景（北東から、空中写真）

中津原遺跡
D地区
E地区
C地区
B地区

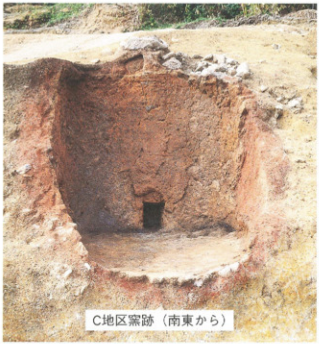
遺跡全景（俯瞰写真）

D地区全景（南から）

C地区北半全景（南東から）

E地区SH７炭化材検出状況（南東から）

E地区SH７土器出土状況


C地区窯跡（南東から）

C地区窯跡断割り断面（南西から）

C地区窯跡断割り断面（南東から）

D地区炭土坑２炭検出状況（南東から）

遺跡から南東方向を望む

出土土器集合写真

例　言

1．本書は兵庫県洲本市下内膳に所在する中津原遺跡（なかつはらいせき）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は基盤整備促進事業（一般型）下内膳地区として下内膳土地改良区の依頼を受け、
第１次調査（確認調査）を平成12年度（2000年）洲本市教育委員会が実施した。
第２次調査（本発掘調査）を平成13年度（2001年）遺跡調査番号2001150として兵庫県教育委員会が実施した。
第３次調査（本発掘調査）を平成13年度（2001年）遺跡調査番号2001200として兵庫県教育委員会が実施した。
第４次調査（本発掘調査）を平成13年度（2001年）洲本市教育委員会が実施した。
また第２次～第３次調査については発掘調査工事として、㈱ダンプルが請負った。

3．現地調査は第１次調査および第４次調査は洲本市教育委員会社会教育課、浦上雅史が、第２次調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所調査第１班、深井明比古、服部　寛が、第３次調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所調査第１班、吉田　昇、深井明比古、服部　寛、尾野幸雄が、第４次調査は洲本市教育委員会、浦上が担当した。

4．整理調査は洲本市教育委員会調査分は浦上が、兵庫県教育委員会調査分は深井が主となって、平成14年度（2002年）に実施した。

5．出土遺物のうち、金属製品の保存処理は加古千恵子のもと行なった。

6．遺構の実測は株式会社パスコが実施した。遺物の実測は嘱託員等が主に行なった。遺構及び遺物の浄書は嘱託員が主に行なった。

7．本書に使用した写真のうち、遺構については調査員が撮影し、発掘中の空中写真測量として㈱パスコに委託した。

8．本書の編集は浦上と深井が主に行ない、服部および尾野が補佐した。

9．本書に使用した標高の数値は、T.P.であり、方位は座標北である。座標は世界測地系を使用している。

10．本書に掲載した挿図の内、第５図は洲本市発行の１／5,000地図を使用したものであり、図版１は昭和22年米軍撮影の空中写真を使用した。なお掲載については洲本市および国土地理院の承認を得ている。

11．本書で使用した遺構番号は通しで呼称した。また挿図中の遺構略号は次のように（SH→竪穴住居跡、SB→掘立柱建物跡、SX→不明遺構、P→柱穴、SK→土坑、SD→溝、ST→墓）呼称を用いている。

12．本書の執筆分担は本文目次および文章中に示した。

13．調査で撮影した写真、遺構図、遺物等は兵庫県教育委員会および洲本市教育委員会で保管している。

14．最後に発掘調査ならびに本書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。記して感謝の意を表します。（以下、順不同敬称略）

兵庫県教育委員会淡路教育事務所、下内膳地区土地改良区、洲本市立淡路文化史料館、㈱淡路島テレビジョン

青木哲哉、伊藤宏幸、岡本　稔、岡山真智子、小東憲朗、白水祥文、中木恵一、波毛康宏、福永伸哉、北條芳隆、松木武彦、森岡秀人、山口順二

本文目次

第1章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯……(浦上雅史)…1
第2節　調査経過と調査体制……(古田昇・深井明比古)…3
第3節　整理作業……(深井)…5
第4節　調査後の遺跡・遺物及び資料……(深井)…6

第2章　遺跡の環境

第1節　地理的環境……(深井)…7
第2節　歴史的環境……(深井)…10

第3章　遺　構

第1節　A地区……(浦上・服部寛)…13
第2節　B地区　段状遺構4……(尾野幸雄)…14
第3節　C地区　SH9……(服部)…16
SH8
SB2
SB3
段状遺構3
楽隊
第4節　D地区　SH1……(服部)…22
SH2
SH3
SH4
SH5
SH11
SB1
ST1
段状遺構1
炭土坑1
炭土坑2
第5節　E地区　SH6……(服部・尾野)…29
SH7
段状遺構2
第6節　F地区　SB4……(浦上)…31
SB5

第4章　遺　物

第1節　弥生土器……(深井・浦上)…33
第2節　中世土器……(深井)…44
第3節　石製品……(深井)…45
第4節　鉄製品……(深井)…46

第5章　科学分析

第1節　放射性炭素年代測定……(㈱古環境研究所)…47

第6章　まとめ

第1節　中津原遺跡の溜構について……(服部)…49
第2節　淵本市周辺部における弥生集落立地の一考察……(浦上)…51
第3節　中津原遺跡の考察……(深井)…53

挿図目次

第1図　下内膳地区圃場整備位置図……2
第2図　調査地区割り図……4
第3図　淡路島及びその周辺地域の地質図……7
第4図　中津原遺跡周辺地形分類図……9
第5図　周辺遺跡地図……10・11
第6図　A地区位置図……13
第7図　A地区　SH10……13
第8図　A地区全体図……13
第9図　B地区位置図……15
第10図　B地区全体図……14・15
第11図　B地区　段状遺構4……15
第12図　C地区位置図……16
第13図　C地区全体図……16・17
第14図　C地区　SH9……17
第15図　C地区　SH8……18
第16図　C地区　SB2……19
第17図　C地区　SB3……19
第18図　C地区　段状遺構3……20
第19図　C地区　窯跡……21
第20図　D地区位置図……22
第21図　D地区全体図……22・23
第22図　D地区　SH1……23
第23図　D地区　SH2……24
第24図　D地区　SH3……25
第25図　D地区　SH4……25
第26図　D地区　SH5……26
第27図　D地区　SH11……26
第28図　D地区　SB1……27
第29図　D地区　ST1……27
第30図　D地区　段状遺構1……27
第31図　D地区　炭土坑1……28
第32図　D地区　炭土坑2……28
第33図　E地区位置図……29
第34図　E地区全体図……29
第35図　E地区　SH6……29
第36図　E地区　SH7・段状遺構2……30
第37図　F地区位置図……31
第38図　F地区全体図……31
第39図　F地区北半部土層断面図……32
第40図　F地区　SB4……32
第41図　F地区　SB5……32
第42図　A地区出土土器……33
第43図　B地区SK25出土土器……33
第44図　B地区段状遺構4 P403出土土器……33
第45図　B地区包含層出土土器……34
第46図　C地区SH8出土土器……35
第47図　C地区段状遺構3出土土器……36
第48図　C地区包含層出土土器……36
第49図　D地区SH1出土土器……37
第50図　D地区SH2出土土器……37
第51図　D地区SH4出土土器……38
第52図　D地区SH5出土土器……38
第53図　D地区SH11出土土器……38
第54図　D地区SB1出土土器……38
第55図　D地区段状遺構1出土土器……38
第56図　D地区SX2出土土器……38
第57図　D地区ST1出土土器……39
第58図　D地区包含層出土土器1……40
第59図　D地区包含層出土土器2……41
第60図　E地区SH6出土土器……41
第61図　E地区SH7出土土器……41
第62図　F地区出土土器……43
第63図　中世土器……44
第64図　石製品……45
第65図　鉄製品……46
第66図　竪穴住居跡の類型……49

表目次

第1表　周辺遺跡一覧表……11
第2表　石製品一覧表……45
第3表　鉄製品一覧表……46
第4表　竪穴住居跡一覧表……50

巻頭図版目次

巻頭図版１
　上：遺跡遠景（東から、空中写真）
　下：遺跡遠景（北東から、空中写真）
巻頭図版２・３
　遺跡全景（俯瞰写真）
巻頭図版４
　上：D地区全景（南から）
　下：C地区北半全景（南東から）
巻頭図版５
　上左：E地区SH７炭化材検出状況（南東から）
　上右：E地区SH７土器出土状況
　中左：C地区窯跡（南東から）
　下左：C地区窯跡断割り断面（南東から）
　中右：C地区窯跡断割り断面（南西から）
　下右：D地区炭土坑２炭検出状況（南東から）
巻頭図版６
　上：遺跡から南東方向を望む
　下：出土土器集合写真

写真図版目次

図版１
　俯瞰・立体視写真（1947年４月12日米軍撮影）
図版２
　上：遺跡遠景（洲本城跡から）
　中：遺跡全景（西から）
　下：遺跡全景（南東から）
図版３
　１．A-１地区全景（北から）
　２．A地区SH10（東から）
　３．B地区段状遺構４（南東から）
　４．B地区P403土器出土状況
図版４
　１．C地区SH８（南東から）
　２．C地区SH９（南東から）
　３．C地区SB３（東から）
　４．C地区SB２（東から）
図版５
　１．C地区段状遺構３（南から）
　２．C地区段状遺構３　棒状石製品出土状況
　３．C地区段状遺構３　台石出土状況
　４．C地区窯跡（東から）
　５．C地区窯跡検出状況
　６．C地区窯跡煙道排煙口
　７．C地区窯跡煙道吸入口
図版６
　１．D地区南半全景（東から）
　２．D地区SH１（東から）
　３．D地区SH４（東から）
図版７
　１．D地区SH２（東から）
　２．D地区SH３（東から）
　３．D地区SH５（東から）
図版８
　１．D地区全景（北から）
　２．D地区段状遺構１（南東から）
　３．D地区SB１（東から）
図版９
　１．D地区SX２検出状況（西から）
　２．D地区SX２完掘状況（西から）
　３．D地区ST１（東から）
　４．D地区炭土坑１炭検出状況（南から）
　５．D地区炭土坑１完掘状況（東から）
　６．D地区炭土坑２炭検出状況（東から）
　７．D地区炭土坑２完掘状況（東から）
図版10
　１．E地区全景（東から）
　２．E地区SH６（東から）
　３．E地区SH７炭化材検出状況（東から）
　４．E地区SH７土器出土状況
図版11
　１．F地区全景（南から）
　２．F地区SB４（北東から）
　３．F地区SB５（南から）
図版12
　１．F地区北半部全景（北から）
　２．F地区遺物包含層セクション（東から）
　３．F地区遺物包含層土器出土状況
図版13
　上：B地区出土土器
　下：C地区SH８出土土器
図版14
　C地区出土土器
図版15
　上：D地区SH１出土土器
　中：D地区SH２出土土器
　下：D地区SH４出土土器
図版16
　上：D地区SH５・SH11・段状遺構１出土土器
　下：D地区ST１出土土器
図版17
　D地区包含層出土土器
図版18
　上：E地区SH６出土土器
　下：E地区SH７出土土器
図版19
　A～E地区石製品・鉄製品
図版20
　F地区出土土器

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

分布調査　平成８年１月から３月にかけて実施した基盤整備促進事業（一般型）下内膳地区予定地49.5haにおける遺跡分布調査により、事業予定地内で、弥生土器、須恵器、瓦質土器片を中心とする遺物の散布が各所で見られ、周知の下内膳遺跡、曇華池遺跡以外に多くの遺跡の存在が予想された。

確認調査　上記分布調査の成果に基づき、平成10年度より12年度にかけ順次、試掘・確認調査を実施し、当該事業予定地内における遺跡の実態が凡そ浮かび出た。

曇華池　曇華池西側一帯の曇華池遺跡では、遺跡南側谷部で木樋、矢板列など奈良時代前半の治水溜漑施設、水田跡が確認され、遺跡北側では、飛鳥時代から中世にかけての大小の掘立柱建物跡、倉庫などが確認され、生産の場と居住区とを有機的に把握することができた。

コカイチ　曇華池東側に開口する谷間地からは、平安時代から鎌倉時代にかけての遺物が多く出土し、鎌倉期の掘立柱建物跡、同期の鍛冶関連遺構などが確認された。

五反田　「火踊り」で知られる三昧のある南東に開口する谷の開口部西側を中心として弥生時代後期から中世にかけての遺物が多く出土しているが、二次堆積によるものがほとんどで、丘陵斜面地に遺跡の存在が想定される。

由良木　上記谷の中央部東側斜面地及び丘陵上から、弥生時代後期の竪穴住居跡、鎌倉期の鍛冶遺構等が確認された。また、サヌカイト製のスクレイパー、石鏃、剥片が出土しており、弥生時代以前の遺跡の存在を示唆している。

西の森　曇華池西方を流れる釈迦堂川の西側に稲森住吉神社があり、同神社周辺が西の森遺跡として小さくマークされていたが、この度の調査で神社を中心に北は釈迦堂、南は神社の鳥居までの範囲であることが明らかとなった。神社から北舞は弥生時代の遺跡が、神社南側には中世の遺跡が存する。

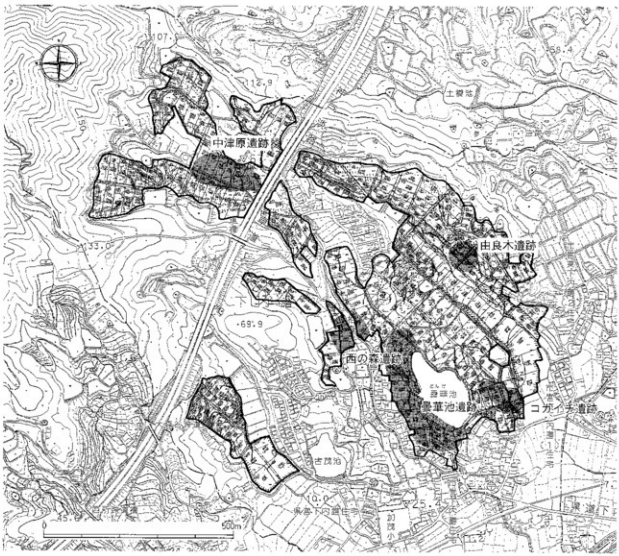
森ノ奥　先山ニュータウン西側谷部一帯は数度にわたる土石流の厚い堆積が見られたが、その堆積土中に２層の弥生時代後期の包含層が確認された。包含層は砂層からなり、あまり土壌化しておらず、二次堆積と思われ、集落があったものの洪水によりかなり荒らされたと考えられる。

中津原　谷の最奥部、本州四国連絡道路から山裾にかけての段丘上から、弥生時代後期の竪穴住居跡、段状遺構、中世の掘立柱建物跡の柱穴が検出された。ここは南東向きの斜面地になり、扇状地上一帯に弥生時代後期、中世集落の存在が明らかとなった。

遺跡名　以上のように、試掘・確認調査で、下内膳遺跡を拠点集落として、その北側丘陵地帯に、下内膳遺跡と関連する多くの遺跡の存在が確認された。確認調査時には、便宜的に調査年次、地区単位で各地区を呼称したが、小見出しであらわしたそれぞれの遺跡の存する田の字名をとって遺跡名とする。なお、曇華池遺跡は中ノ内、上ノカイチの字からなり曇華池の字は無いが、確認調査で出土した木樋が曇華池築堤にかかわるものと推察されることから池の名を取り曇華池遺跡とする。以下、コカイチ遺跡、五反田遺跡、由良木遺跡、西の森遺跡、中津原遺跡となる。

上記確認調査の結果に基づき、遺跡の存するところでは包含層上30cm以上の保護層を確保するた

め、工法変更によりかなりの部分が地中で保存されているが、面的に小規模な切り土、排水路部分については調査を実施し、基盤整備事業の進捗に支障のないよう努めた。しかし、中津原遺跡の存する地区は、急斜なため、計画では切り土面積が5,000㎡以上に及ぶことから、下内膳土地改良区、洲本市ふるさと整備課と再三にわたって事前協議を重ね、最大限の工法変更を経て、平成13年8月27日付をもって下内膳土地改良区理事長より、4,481㎡を対象とした本発掘調査依頼文が洲本市教育長あてに提出された。ところが、本調査が大規模調査であるということと、平成13年度中に調査を終えなければいけないという時間的制約により、洲本市の調査能力を超えた調査であることから兵庫県教育委員会に調査支援の可能性を打診。兵庫県教育委員会と洲本市教育委員会との合同調査の可能性と調査分担等の協議を経た後、平成10年9月29日付文化庁次長通知「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」に基づき、平成13年11月9日付にて兵庫県教育委員会に調査支援を文書にて依頼。履行期限を平成14年3月25日とし、平成13年11月12日付をもって下内膳土地改良区と洲本市教育委員会とで本発掘調査の委託契約を締結した。



第1図　下内膳地区圃場整備位置図

第２節　調査経過と調査体制

第１次調査

調査機関　洲本市教育委員会

調 査 員　浦上　雅史

請負業者　㈱洲本開発総合商事

調査期間　2000年（平成12年）10月26日～
2001年（平成13年）３月15日

洲本市立加茂小学校５・６年生への説明風景

１．第１次調査の概要

中津原遺跡の確認調査は平成12年10月～平成13年３月にわたり実施された。確認箇所は切り土部分を中心に配置し、人力により掘削した。坪のほとんどから弥生土器が出土し、遺物包含層の下面にて炭や焼土が検出されるなど、火災にあった弥生時代の竪穴住居跡の存在が予想された。

調査終了後、すべての坪・トレンチは直ちに埋め戻しを実施した。

以上の結果および周辺の現地形観察から、丘陵上一帯を遺跡の範囲と想定した。良好な堆積状況を示す遺物包含層の存在から丘陵地に営まれた弥生時代後期ごろの集落になることが予想された。

第２次調査（遺跡調査番号：2001150）

調査機関　兵庫県教育委員会

調 査 員　深井明比古、服部　寛

事務員等　西郷　五子

請負業者　㈱ダンプル

調査期間　2001年（平成13年）12月13日～2002年（平成14年）１月10日

２．第２次調査の概要

中津原遺跡の本発掘調査は平成13年12月～平成14年１月にわたり実施された。調査箇所はＡ１地区で調査面積360㎡である。調査は機械掘削、人力により掘削した。調査区の中央中段で弥生時代後期の隅丸方形竪穴住居跡が１棟発掘された。このほか柱穴などが検出されたが、明確な建物を復元するには至っていない。

第３次調査（遺跡調査番号：2001200）

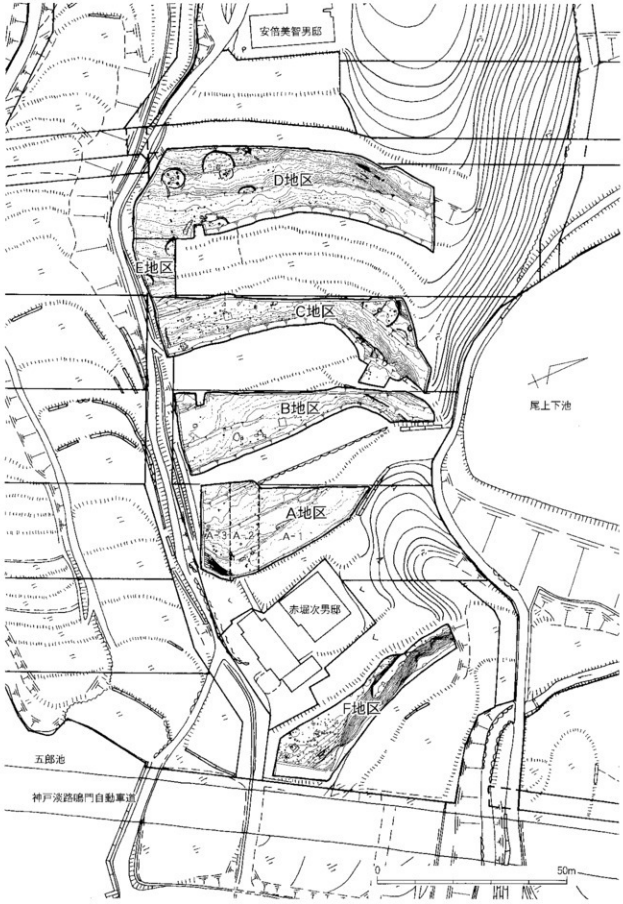
調査機関　兵庫県教育委員会

調 査 員　吉田　昇、深井明比古、服部　寛、尾野　幸雄

事務員等　西郷　五子、打越　由加、山下章也子

請負業者　㈱ダンプル

調査期間　2002年（平成14年）１月21日～３月25日


安倍美智男邸
D地区
E地区
C地区
B地区
A地区
A-3
A-2
A-1
尾上下池
赤堀次男邸
F地区
五郎池
神戸淡路鳴門自動車道
0
50m

第２図　調査地区割り図

３．第３次調査の概要

中津原遺跡の本発掘調査は平成14年１月～３月にわたり実施された。調査箇所はＡ２、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ地区で調査面積3,200㎡である。調査は機械および人力により掘削した。この調査次がもっとも規模が大きい。丘陵上端では標高84mを測り、下位でも67mを測る。調査区は２次調査区のＡ１地区の西側に接する箇所をＡ２区とし、西方の丘陵上に位置する調査区をＢ・Ｃ・Ｆ・Ｄ・Ｅ区とした。調査は標高の上方から下方に向かって進み、機械掘削土や人力掘削土は付近の盛り土部分等に仮置きした。調査はＤ地区から始めたが、弥生時代後期の竪穴住居跡や段状遺構、中世の炭焼き関連の遺構などが次々に検出され、弥生時代後期の竪穴住居跡は計10棟、掘立柱建物跡３棟など弥生時代後期前半の集落の姿が明らかになってきた。

第４次調査
調査機関　洲本市教育委員会
調 査 員　浦上　雅史
補助員等　宮谷淳一郎、神代　大輔
委託業者　㈱ダンプル
調査期間　2002年（平成14年）１月28日～３月25日

現地説明会風景

４．第４次調査の概要

第４次調査としてＡ３およびＦ地区の本発掘調査を平成14年１月～３月にわたり実施した。調査箇所はＡ３地区182㎡、Ｆ地区740㎡である。調査は機械および人力により掘削した。この調査区はＡ２地区と接しており、Ａ２地区では南西断面で検出していた弥生時代の柱穴などが発掘された。また南端では旧地形の落ち込みが検出され、地形が大きく変換する箇所であることが判明した。

Ｆ地区では中世の掘立柱建物跡が検出されたほか、弥生時代の遺物包含層も発掘した。

第３節　整理作業

中津原遺跡の整理作業は兵庫県および洲本市の担当地区を各々が整理した。兵庫県担当分は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で整理作業を実施した。洲本市は淡路文化史料館にて整理作業を実施した。

１．平成14年度の整理作業

作業は、土器のネーミング、接合・補強、土器・石器・鉄製品の実測・拓本、復元、トレース、写真撮影・写真整理、保存処理、レイアウト・印刷である。作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、洲本市教育委員会で行なった。

（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）

整理担当職員	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所企画調整班	主査	深井明比古
	兵庫県教育委員会事務局文化財室文化財係	事務職員	服部　寛
	兵庫県立姫路養護学校	教諭	尾野　幸雄
整理調整職員	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所整理保存班	技術職員	岡本　一秀
整理担当嘱託職員	杉本　淳子・吉田　優子・喜多山好子・眞子ふさ恵・友久　伸子・石野　照代・中田　明美・西野　淳子・蔵　幾子・小野　洞子・大仁　克子・三好　綾子・藤井　光代・三島　重美		

（洲本市教育委員会）

整理担当職員	洲本市教育委員会社会教育課	文化振興係長	浦上　雅史
整理作業関係者	馬野　弥生、中野美恵子、山口　孝幸ほか		

第4節　調査後の遺跡・遺物及び資料

1．調査後の遺跡について

a．基盤整備促進事業（一般型）下内膳地区に伴う中津原遺跡の発掘調査は2002年（平成14年）3月に終了した。その後、2002年（平成14）11月から基盤整備工事が開始された。

b．事業地内における本発掘調査箇所は事業者との協議どおり記録保存箇所であり、未発掘調査箇所のすべてが遺跡保存地区である。

土器復元風景

2．調査後の遺物・資料について

a．遺物等収蔵品　本遺跡の出土遺物は調査担当にしたがって、兵庫県教育委員会と洲本市教育委員会で収蔵される。

b．収蔵形態　これらの出土品の多くは18～36リッター入りプラスチックコンテナに収納している。コンテナには遺跡名、調査番号、地区、遺構、土層等が記される他に報告番号、実測番号が記されている。

c．収蔵場所

（兵庫県教育委員会分）

名　称：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館

所在地：兵庫県明石市魚住町清水字立合池ノ下630－1

（洲本市教育委員会分）

名　称：洲本市教育委員会文化財資料保管庫

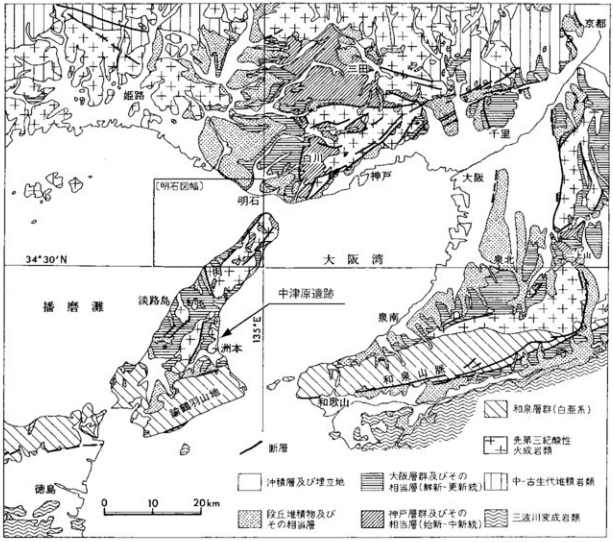
所在地：兵庫県洲本市山手3丁目3－3

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

位置　　瀬戸内海最大の島である淡路島は、兵庫県の本州側と離れて、東は大阪湾、西は播磨灘、南は太平洋に面している。島の北は明石海峡、東は紀淡海峡、南西は鳴門海峡に隔てられており、鳴門海峡及び明石海峡は本州四国連絡道路ですでに結ばれている。

規模　　１市７町に人口15万人が居住する淡路島は北端の淡路町松帆から南の南淡町沼島までは54km、東の浜本市由良から西端の西淡町鐙崎まで28kmを測る南北に長い島である。面積は596㎢あり、兵庫県全土の7.1％を占める。地形地質的には南北に大きく分かれる。北部は常隆寺山（515m）・先山（448m）などの山々が北東から南西に延びる津名山地を形成し、平野は少ない。南部は柏原山（569m）・諭鶴羽山（608m）などが東から西南西にのびる諭鶴羽山地により形成され、これらの境に三



第３図　淡路島及びその周辺地域の地質図
（明石地域の地質　通産省地質調査所1990から）

原平野・洲本平野の沖積地が発達している。

淡路島北部の地質構造は北部は六甲山地と同様の領家花崗岩類と低地を埋める神戸層群および大阪層群により形成されている。淡路島北部は海岸部まで山地が切り立ち、平野が狭く、海岸近くまで棚田が発達し山麓の谷や沢にはため池が潅漑用に利用されている。淡路町岩屋に位置する大和島や絵島は海蝕崖により各所が抉られた奇岩として有名である。また北部には六甲山系を降起させた断層が多く存在する。1995年１月17日に発生した兵庫県南部地震により隆起した野島断層は淡路島北部の西海岸沿いにある。

南部は中央構造線の北側に位置する諭鶴羽山地を中心とし、中生代白亜紀の和泉層群の砂岩・頁岩およびそれらの互層からなる。淡路島の南岸沿いに中央構造線が東西にあり、淡路島の南４kmに位置する沼島は中央構造線の南に位置する。この関係で沼島は結晶片岩で形成されている。一方諭鶴羽山地北側の三原平野および洲本平野に接する部分は段丘が発達しており、なだらかな地形を形成する。

淡路島北部は平野が狭い地形条件から山麓の谷や沢にはため池が多く、それらは潅漑用に利用されており、海岸近くまで迫る地形に棚田が発達している。それに対して平野部が発達している南部は温暖な気候を反映して二毛作や三毛作が続けられている。

洲本市　洲本市は人口約４万２千人、淡路島中央南寄りの大阪湾に面する東海岸に位置し、北は津名町、北西は播磨灘に面する五色町、西には緑町、南西は南淡町と接している。淡路中央部から派生する山塊と南部に東西方向に延びる諭鶴羽山地、その間に広がる扇状地及び沖積地からなる立地条件下にある。市内は南北20km、東西13.5kmで、面積は124㎢である。市内の平地は洲本川及び千草川下流域に広がる一方、海に面する箇所の多くは山塊が迫っている。

洲本市北部の山地における地質構造は前述のとおり六甲山系にあたるため、領家花崗岩類に属している。一方、諭鶴羽山地の南には中央構造線が南部に横たわり、その南側は結晶片岩地帯となる。また市内のいたる箇所で断層が見られる。

地形と立地　なお遺跡は北側に位置する先山から派生する中位段丘上に位置する（第４図参照・註１）。

１．遺跡周辺には段丘面が４つ認められる。そのうち、最も低い段丘は完新世段丘である。残りの３つは更新世に形成されたもので、そのうち中津原遺跡は中位の段丘に位置する。

２．更新世段丘は花崗岩からなる先山の麓に分布する。これらは扇状地が段丘化したもので、先山からの小河川によってもたらされた堆積物で構成されている。

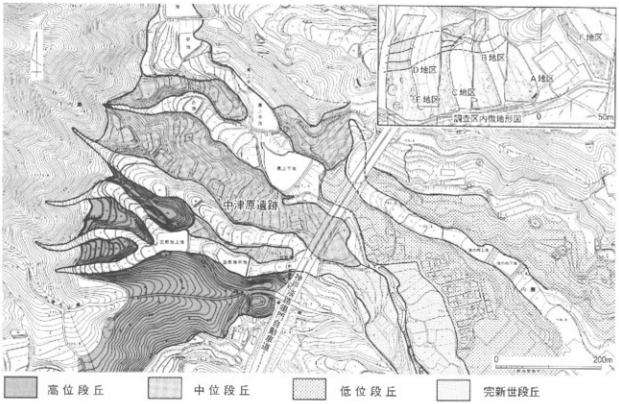
３．遺跡の位置する段丘は中位段丘群に属するものと推定される。段丘堆積物はほとんど風化を受けていない。

微地形・堆積物　１．遺跡の位置する堆積物は下位から順に褐色のシルト質砂礫、褐色のシルト質砂礫（礫の直径が１cm以下）、黒褐色の砂質シルトおよび表土である。砂礫は９割以上が花崗岩を起源としている。

２．調査区の北東端には大阪層群のシルトがみられる。このシルトは段丘形成の直前に浸食からまぬがれたものと考えられる。

３．最下位で確認されるシルト質砂礫が、扇状地の本体をなす堆積物である。上面には凹凸がみられ、これをその上位のシルト質砂礫（礫の直径が１cm以下）が被覆する。さらに上位の黒褐色砂質シルトは、下位のシルト質砂礫が土壌化したものである。

４．調査区の北東部には旧河道が分布する。これは東南東へのび、調査区の南東側に存在する小規



第４図　中津原遺跡周辺地形分類図

模な開析谷に連続する。この開析谷は、段丘化の後に谷頭浸食によって形成されたものである。

５．弥生時代後期前半の竪穴住居跡はC地区の１棟を除いて旧中州上に立地する。弥生時代の掘立柱建物跡も１棟以外は同じ立地である。

植生　　洲本市の植生としては市の木にも指定されている松が有名であるが、基本は常緑照葉樹林帯である。

産業　　洲本市の産業としては、農業や漁業はもとより洲本温泉などの観光も盛んである。一方、大阪湾近辺の漁業も盛んであり、海産物としてはノリやワカメの養殖が盛んである。神戸淡路鳴門自動車道が開通後は京阪神とは短時間で結ばれ、烏内の人・物の動きも変化するものと考えられる。

註１　青木哲哉氏のご教示を得た。

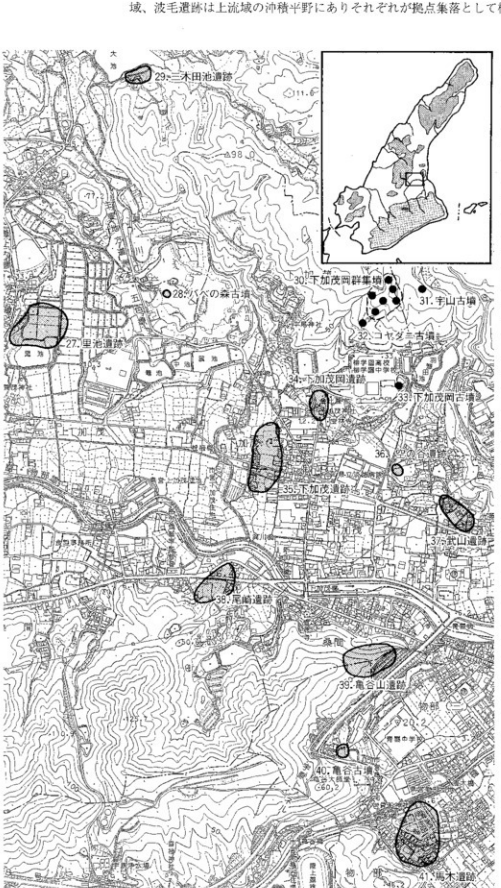
(参考文献)

・神戸新聞出版センター1983『兵庫県大百科事典』

第2節　歴史的環境

洲本平野における遺跡のほとんどは西から東に向かって東流する洲本川の北側の平野部及び丘陵上に位置する。最も古い遺跡は縄文前期にはじまる武山遺跡である。洲本川下流に近い沖積平野に形成された海岸段丘上に位置する。縄文遺跡としての武山遺跡は前期以後晩期に至るまで継続する。

弥生時代に入っても途切れることなく縄文時代から継続して住み続け、弥生時代前期古段階の土坑、弥生中期前半の方形周溝墓、弥生後期の溝等が検出されており、浦木川下流域における拠点集落である。武山遺跡につぐ弥生時代の遺跡は下内膳遺跡と波毛遺跡である。いずれも弥生時代前期に始まる遺跡で中期後半まで継続し、中期末、後期前半に途切れる。下内膳遺跡は、浦木川の中流域、波毛遺跡は上流域の沖積平野にありそれぞれが拠点集落として機能していたようである。因み



第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1	中津原遺跡	洲本市下内膳	集落跡	弥生・中世
2	野神遺跡	洲本市下内膳	集落跡	弥生
3	新白遺跡	洲本市大森谷	散布地	弥生
4	大森谷遺跡	洲本市大森谷	集落跡	弥生
5	大森谷浜田遺跡	洲本市大森谷	集落跡	弥生
6	大森谷里池遺跡	洲本市大森谷	集落跡	弥生
7	方城遺跡	洲本市下内膳	散布地	弥生
8	尾筋丸山遺跡	洲本市上内膳	集落跡	弥生
9	尾筋岡遺跡	洲本市上内膳	散布地	弥生
10	向上遺跡	洲本市上内膳	散布地	弥生
11	森遺跡	洲本市上内膳	集落跡	弥生・中世
12	ハタ遺跡	洲本市上内膳	集落跡	弥生
13	大西遺跡	洲本市納	集落跡	弥生
14	寺中遺跡	洲本市納	集落跡	弥生
15	鴨根堂遺跡	洲本市納	集落跡	弥生
16	波毛遺跡	洲本市納	集落跡	弥生・古墳
17	先山古墳	洲本市大野	古墳	古墳
18	桑間ナガタ遺跡	洲本市桑間	集落跡	弥生
19	下内膳遺跡	洲本市下内膳	集落跡	弥生～中世
20	安宅館跡	洲本市下内膳	城跡	中世
21	西の森遺跡	洲本市下内膳	集落跡	弥生
22	桑事池遺跡	洲本市下内膳	集落跡	弥生・奈良
23	コカイチ遺跡	洲本市下内膳	集落跡	中世
24	由良木遺跡	洲本市下内膳	集落跡	弥生
25	大谷遺跡	洲本市下内膳	集落跡	弥生
26	毛次遺跡	洲本市下内膳	集落跡	弥生
27	里池遺跡	洲本市上加茂	製塩遺跡	奈良
28	パパの森古墳	洲本市上加茂	古墳	古墳
29	三木田池遺跡	洲本市三木田	集落跡	縄文
30	下加茂岡群集墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
31	宇山古墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
32	コヤダニ古墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
33	下加茂岡古墳	洲本市下加茂	古墳	古墳
34	下加茂岡遺跡	洲本市下加茂	集落跡	弥生
35	下加茂遺跡	洲本市下加茂	集落跡	弥生
36	空の谷遺跡	洲本市下加茂	集落跡	弥生
37	武山遺跡	洲本市下加茂	集落跡	縄文・弥生
38	尾崎遺跡	洲本市桑間	集落跡	弥生
39	亀谷山遺跡	洲本市桑間	集落跡	弥生
40	亀谷古墳	洲本市物部	古墳	古墳
41	馬木遺跡	洲本市物部	散布地	弥生

に武山遺跡から下内膳遺跡までは2㎞、下内膳遺跡から波毛遺跡までは1.5㎞である。

それぞれの拠点集落を中心に半径1㎞以内の丘陵上に弥生遺跡が点在する。武山遺跡周辺では、下加茂岡遺跡、尾崎遺跡、亀谷山遺跡がある。いずれも弥生時代中期末から後期前半の遺跡である。なお、下加茂遺跡の内容は明らかでないが、馬木遺跡は後期終末の遺跡である。

下内膳遺跡周辺では、東から大谷遺跡、毛次遺跡、由良木遺跡、曇華池遺跡、西の森遺跡、中津原遺跡、大森谷遺跡などがある。大谷遺跡は弥生時代中期末、中津原遺跡、西の森遺跡、大森谷遺跡は後期前半、毛次遺跡、由良木遺跡、曇華池遺跡は後期後半から終末にかけての遺跡である。

波毛遺跡周辺では、森遺跡、寺中遺跡の内容が明らかになっている。森遺跡からは弥生時代中期末の掘立柱建物跡、寺中遺跡からは弥生時代中期末の掘立柱建物跡、後期後半の方形周溝墓、竪穴住居跡が検出されている。森遺跡周辺の遺跡は調査されていないが、採集された遺物では弥生後期の遺跡である。このように、各拠点集落を中心にあたかも分村したかのように弥生遺跡が分布するが、これらの遺跡は継続性がなく、弥生時代後期後半のある時期をもって廃絶する。

弥生時代終末期（庄内式併行期）になると、下内膳遺跡が最も大規模な遺跡となり、他の拠点集落である武山遺跡、波毛遺跡では今のところ同期の明確な遺構は検出されていない。同期の遺跡は下内膳遺跡周辺の丘陵上で若干確認されている。

古墳時代に入ると、遺跡数は減少する。集落遺跡としては、下内膳遺跡、波毛遺跡から布留式併行期の竪穴住居跡などが検出されている。古墳時代後期にはいると、さらに減少し、森遺跡、波毛遺跡から竪穴住居跡が検出されているが、下内膳遺跡では今のところこの時期の遺物、遺構は確認されていない。

古墳は下加茂岡にあるコヤダニ古墳が前期古墳として著名である。後期古墳は下加茂岡群集墳、ババの森古墳、亀谷古墳、先山古墳などがある。柳学園の校地南東隅にある下加茂岡古墳とババの森古墳では主体部に緑泥片岩製の箱式棺が採用されており、紀伊地方との関連が指摘される。

奈良、平安時代の遺跡はというと、遺物の散布は各所で見られるものの明確な遺構の確認されたのは、下内膳遺跡と曇華池遺跡である。下内膳遺跡からは奈良時代、平安時代の掘立柱建物跡、曇華池遺跡からは飛鳥時代の掘立柱建物跡、奈良時代前半の用排水施設が確認されるなど同遺跡ともに律令期における中心的集落であったことが伺える。また、里池遺跡も奈良時代の遺跡である。これら律令期の遺跡からはいずれも製塩土器が出土している。

鎌倉、室町時代の遺跡では、下内膳遺跡から大型の掘立柱建物跡が検出されており、寺中遺跡、森遺跡、中津原遺跡、由良木遺跡、そして曇華池遺跡、コカイチ遺跡から鎌倉、室町時代の掘立柱建物跡が検出されている。この寺中以下の遺跡は弥生時代中期末に成立する丘陵上の遺跡と重なっている。因みに、コカイチ遺跡からは、13世紀頃の噴砂の跡が確認されている。

第３章　遺構

第１節　A地区

概要　検出した遺構は、竪穴住居跡、土坑、柱穴である（第８図）。

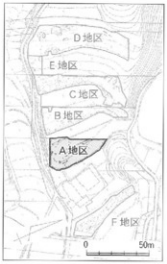
(1) 竪穴住居跡

SH10（第７図）

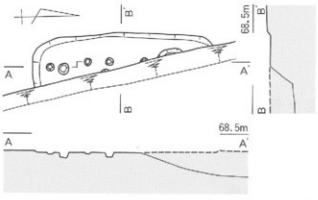
検出状況　調査区中央に位置する。遺存状況は非常に悪く、住居跡の東側の大半を棚田造成時の削平のため破壊されていた。一辺を完全に検出できたのは、西辺のみである。

形状・規模　平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。方位は西辺で座標北を示す。規模は、一辺を唯一確認できる西辺で4.8mを測る。東西方向で残存長は最大1.5mを測る。検出面から床面までの深度は最深部でもわずか10cmである。床面の標高は68.0m前後である。

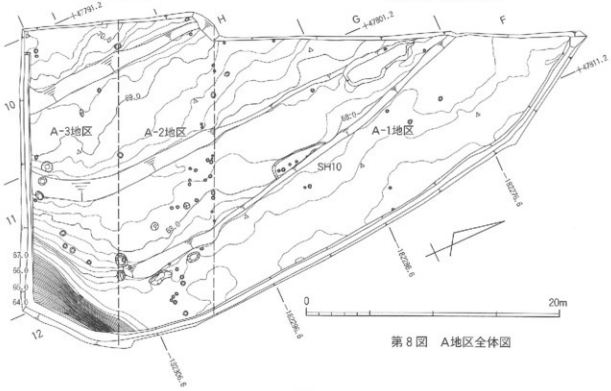
埋没状況　黒褐色シルト混じり中砂～粗砂が堆積していた。自然に埋没したものと考えられる。



第６図　A地区位置図



第７図　A地区 SH10



第８図　A地区全体図

屋内施設　焼土坑、土坑、柱穴を検出した。

焼土坑　床面の南西隅で検出した。平面形は円形を呈し、直径約20cmを測る。断面形は浅い皿形を呈し、床面からの深度はわずか5cmである。被熱で側面は赤化していた。

土坑　床面北側で検出した。大半が削平されている。深度は最深部で15cmを測る。

柱穴　3基検出した。いずれも直径20～30cmで、深度は20cm前後である。

出土遺物　土器の細片が出土しているが、図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

(2) 土　坑

調査区南半で7基検出した。平面形は楕円形や不定形である。遺物は全く出土せず、時期・性格とも判然としない。

(3) 柱　穴

調査区全域で約50基検出した。しかしながら、建物を復元するに至っていない。直径20～30cm前後で、埋土は灰色のものと灰褐色のものがある。

第2節　B地区

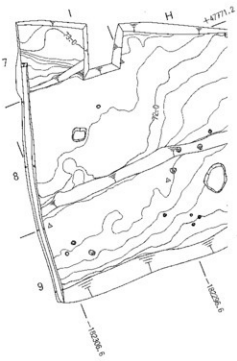
概要　検出した遺構は、段状遺構、土坑、柱穴である（第10図）。

(1) 段状遺構

段状遺構4（第11図）

検出状況　B地区東端の尾根状微高地で検出された溝状の遺構とその南（下）に近接する柱穴列である。東よりの一部が削平され、西側と東側は調査区外に延びている。

形状・規模　溝はN50°Eを指向し、微高地の谷向き斜面の等高線（標高71.2m）にほぼ並行する。連続していたと考えられる溝を8mと2.7mにわたって検出した。幅は最大50cm、検出面からの深度は約7～17cmを測る。近接する柱穴は4基検出され、内3基は溝に平行して並ぶ。平面形は直径25～35cmの不整な円形を呈し、確認面からの深度は22～45cmを測る。溝に平行する西3基には直径15～20cmの柱痕あるいは柱の抜き取り痕が認められた。



出土遺物　P403から把手付壺(4)が出土している。

時期　出土遺物から弥生時代後期前半と考えられる。

(2) 土　坑

調査区南半で6基検出した。平面形は楕円形や不定形

である。遺物はほとんど出土せず、時期・性格とも判然としない。

SK25

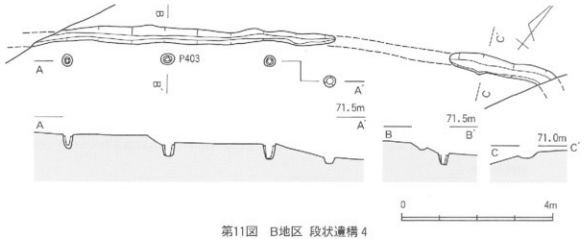
検出状況等　調査区南半の東側に位置する。一辺約１mの不整形な隅丸方形で、検出面からの深度は約35cmである。埋土は褐色細砂～中砂で自然に埋没したものである。

出土遺物　壺(3)が出土している。

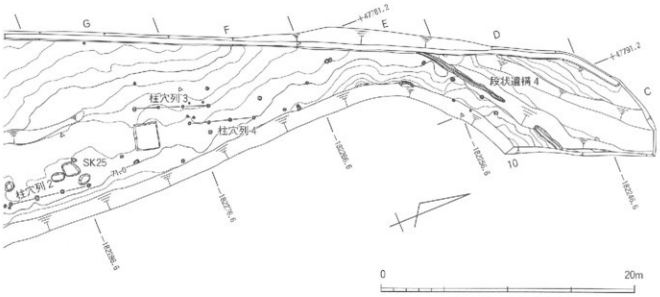
(3) 柱　穴

調査区全域で約70基検出した。調査区中央付近で柱穴列を３列検出したが、建物を復元するに至っていない。直径20～30cm前後で、埋土は灰色のものと灰褐色のものがある。

第９図　B地区位置図



第11図　B地区 段状遺構４



第10図　B地区全体図

第３節　C地区

第12図　C地区位置図

概要　検出した遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、段状遺構、窯跡、土坑、柱穴である（第13図）。

(1) 竪穴住居跡（SH８・９）

SH９（第14図）

検出状況　調査区北端に位置する。住居跡の南東側は棚田造成時の削平のため破壊されていた。また、床面まで削平されており、主柱穴と周壁溝が北西部にわずかに残存する。

形状・規模　平面形は円形を呈する。規模は直径4.5m前後に復元される。床面の標高は75.4m前後である。

屋内施設　主柱穴、周壁溝を検出した。

主柱穴　４基検出した。直径は30cm前後、深度は検出面から10～30cmを測る。

周壁溝　住居跡北西側でのみ残存していた。幅15～30cm、深度は検出面から約５cmを測る。

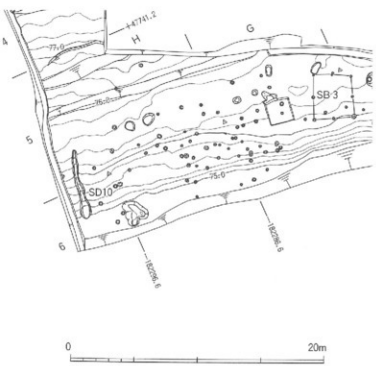
出土遺物　周壁溝から土器の細片が出土しているが、図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

SH８（第15図）

検出状況　調査区北端に位置する。住居跡の南東側は棚田造成時の削平のため破壊されていた。北西側は調査区外である。

形状・規模　平面形は円形を呈する。規模は、直径10.4mを測る。検出面から床面までの深度は最深部で70cmである。床面の標高は76.1m前後である。検出した範囲での床面積は約43.8㎡である。



埋没状況　上層に灰黄褐色中砂～粗砂、下層に暗褐色シルト質中砂が堆積していた。上層からは多量の土器片や礫が出土している。住居の廃絶後、壊れた土器などを人為的に投棄した状況が復元できる。

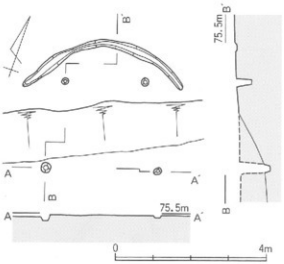
屋内施設　主柱穴、中央土坑、周壁溝、排水溝、焼土面を検出した。

主柱穴　４基検出した。掘り方の直径は50cm前後、柱穴の直

径は30cm前後、深度は床面から65～80cmを測る。本来は8本主柱穴があったものと復元される。床面で13基の柱穴を検出したが、規模の違いから主柱穴を識別できた。

中央土坑　床面中央で検出した。平面形は不整形な円形を呈し、直径約1.2mを測る。断面形は逆台形を呈し、床面からの深度は28cmである。埋土は3層からなり、最下層から炭層、焼土層、黒褐色土層である。

周壁溝　検出した範囲では、壁際を全周する。幅30cm前後、深度は床面から約10cmを測る。傾斜のきつい山側斜面である住居跡の北側では、周壁溝が二重に検出された。埋土はいずれも同様で、同時期に機能していたものであり、住居跡の拡張に伴うものでない。



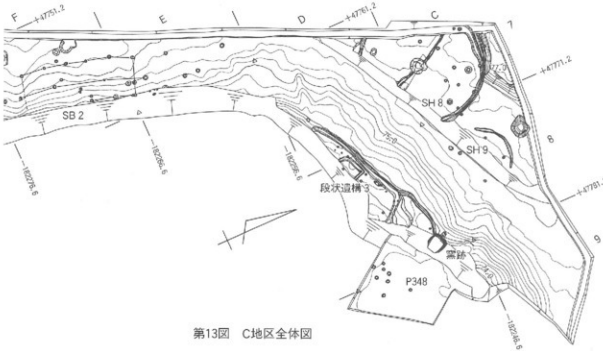
第14図　C地区 SH 9

排水溝　中央土坑を挟んで床面を縦断するように検出された。幅15cm、深度は約20cmを測る。

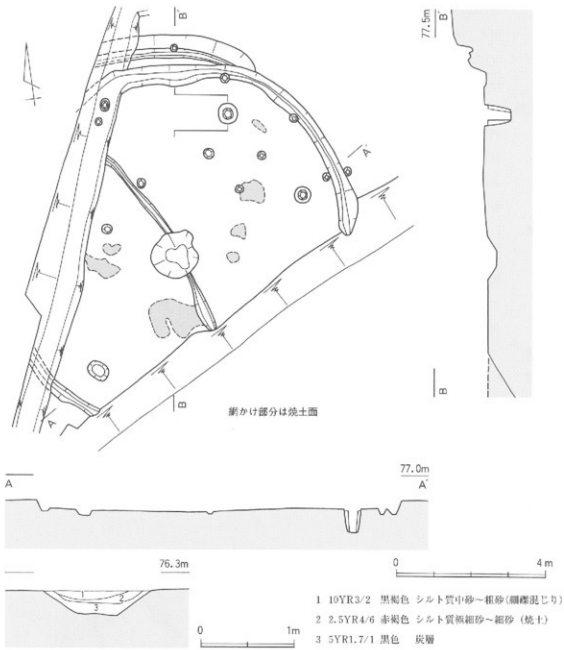
焼土面　7箇所で焼土面を検出した。平面形は不整形である。中央土坑周辺ほど範囲は広い。被熱で赤く、硬化している。

出土遺物　石器（S 2）と多量の土器（37～46）が出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。



第13図　C地区全体図



第15図　C地区 SH 8

(2) 掘立柱建物跡（SB 2・3）

SB 2（第16図）

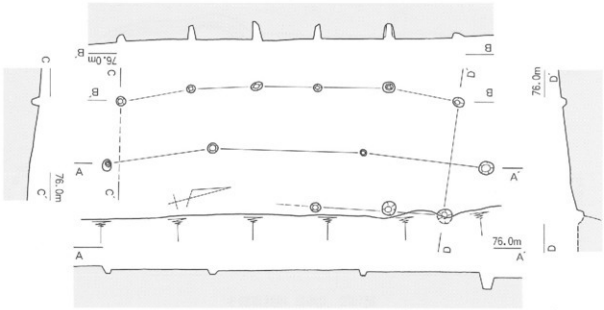
検出状況　調査区中央に位置する。建物跡の東側は棚田造成時の削平のため破壊されていた。

形状・規模　主軸はN16°Eを示す。桁行２間（3.0m）、梁行５間（9.1m）の棟持柱建物に復元される。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行1.5m、梁行1.8mである。

柱穴　掘り方の平面形は円形ないし楕円形を呈する。直径は20～30cmを測る。検出面からの深度は10～50cmを測る。柱痕の直径は20cm前後、深度は20～40cmを測る。

出土遺物　柱穴埋土から土器の細片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。



第16図　C地区 SB 2

SB 3（第17図）

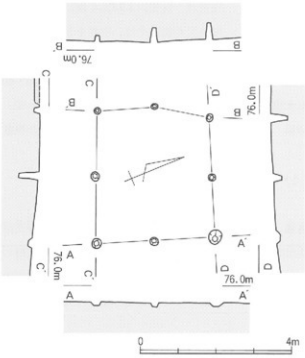
検出状況　　調査区中央のやや南側に位置する。

形状・規模　　主軸はN66°Wを示す。桁行2間(3.1m)、梁行2間（3.5m）の側柱建物である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行1.5m、梁行1.8mである。

柱穴　　掘り方の平面形は円形ないし楕円形を呈する。直径は20～40cmを測る。検出面からの深度は15～50cmを測る。柱痕は確認できなかった。

出土遺物　　柱穴埋土から土器の細片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。



第17図　C地区 SB 3

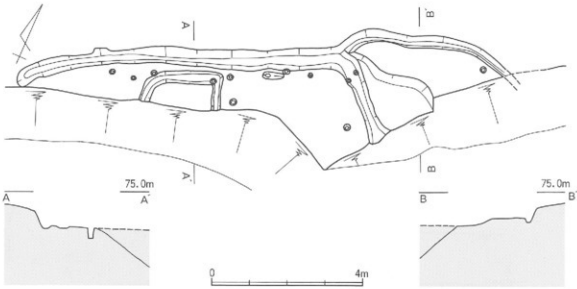
(3) 段状遺構

段状遺構 3（第18図）

検出状況　　調査区北端に位置する。地山を段状に整形して平坦面を造りだした、標高差のある南北2段の平坦面からなる遺構である。段状遺構の南東側は棚田造成時の削平のため破壊されていた。

規模　　規模は、西辺で約13.0mを測る。東西方向で残存長は、最大3.4mを測る。検出面から床面までの深度は最深部で55cmである。床面の標高は74.0m前後である。

埋没状況　　上層に暗褐色細砂～細礫、下層に灰黄褐色細砂～中砂が堆積していた。上層からは多量の土器片



第18図　C地区 段状遺構３

が出土した。段状遺構の廃絶後、土器を人為的に投棄した状況が復元できる。

付属施設　周壁溝、杭列および溝を検出した。

周壁溝　検出した範囲では、壁際を全周する。幅40～60㎝、床面からの深度は約10㎝を測る。

杭列　南北方向の周壁溝に沿って、検出された。直径20㎝前後、床面からの深度は約10～30㎝である。

溝　平面形はコの字に検出され、幅約25～40㎝、深度は約５㎝を測る。

出土遺物　石器（S３・４）と多量の土器（56～63）が出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

(4) 窯　跡

窯跡（第19図）

構造　窯体は窯口部、点火室、炭化室、煙道部で構成される。

検出状況　調査区北東端で検出した。棚田造成時の削平のため、窯口部と点火室の全部および炭化室の一部は残存しないが、炭化室については比較的遺存状況が良い。地山を大きく掘り込んで窯体を築いていることから、奥壁付近では天井部が一部残存しており、煙道部についてもほぼ完全に遺存していた。

炭化室　床面の平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向に残存長で1.2m、奥壁での幅は1.1mを測る。主軸はN28°Wを示す。床面はほぼ平坦で、床の傾斜角はわずかに１°である。高さは天井部の一部残存する奥壁付近で1.1mを測る。床面および窯壁には５㎝前後の厚さで粘土を貼り付けており、燃焼で黄褐色に還元していた。奥壁の煙道吸入口付近の床面を中心に黒色のタール状のものが付着していた。

煙道部　煙道の構築にあたっては、炭化室を掘削した後、奥壁の中央を縦方向に溝状に掘削し、溝を拳大の礫と粘土を貼り付け、蓋をすることで煙道を造り出していた。

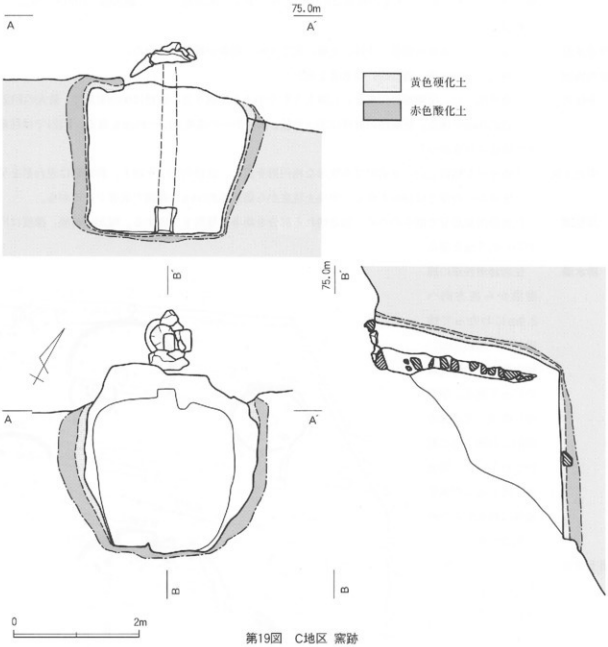
奥壁の煙道吸入口は、奥壁の中心からやや北側にずれた箇所に位置し、高さ20㎝、幅16㎝を測る。煙道の横断面形は縦14㎝、横10㎝の長方形で、約75°の角度で立ち上がり、地上に設けられた煙道排

煙口に至る。煙道排煙口は平面形が円形で、直径18cmである。周囲を石で囲い補強していた。

特徴　構造的な特徴として、①燃焼室の床面はほとんど傾斜しない、②奥壁および側壁が床面から直線的に立ち上がる、③床面から煙道がほぼ直角に立ち上がる、④地山を大きく掘り込む地下式であるといった点が挙げられる。こうした構造は炭窯に特徴的な構造である。また、窯跡内からは、ほとんど遺物が出土しなかった。このことは、操業毎に炭化室内の炭を全て掻き出すため燃焼室内に遺物がほとんど残らないといった炭窯特有の特徴でもある。

出土遺物　窯体内から土師質の土器の細片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　窯体内から時期の特定できる遺物の出土はないが、窯口部前面の作業空間と想定される範囲の柱穴から鎌倉時代の瓦器椀（195）が出土しており、また窯跡周辺に限り包含層に同様の遺物が認められることから、当該期の炭窯であると考えられる。



第19図　C地区 窯跡

第4節　D地区

第20図　D地区位置図

概要　検出した遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、段状遺構、炭土坑、集石土坑、土坑、溝、柱穴である（第21図）。

(1) 竪穴住居跡

SH1（第22図）

検出状況　調査区南端の西よりに位置する。住居跡の南東側は棚田造成時に大きく削平されているが、床面はかろうじてほぼ遺存していた。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。規模は、直径で長軸方向に6.4m、短軸方向に5.6mを測る。床面の標高は81.5m前後である。床面積は約28㎡である。

埋没状況　上層ににぶい黄褐色細砂～中砂、下層に褐色中砂～粗砂が堆積していた。

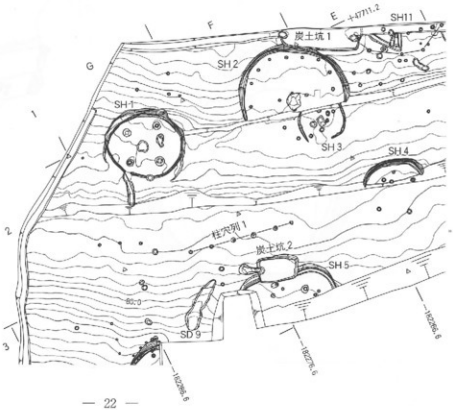
屋内施設　主柱穴、中央土坑、周壁溝、排水溝を検出した。

主柱穴　4基検出した。平面形は円形ないし隅丸方形を呈する。掘り方の直径は60cm前後で、最大のP125は1辺約70cmを測る。柱痕跡の直径は30cm前後、床面からの深度は55～85cmを測る。P121では柱痕跡は確認されなかった。

中央土坑　床面中央で検出した。平面形は不整形な楕円形を呈し、直径約90cmを測る。断面形は逆台形を呈し、床面からの深さは18cmを測る。中央土坑底から周辺幅約50cmの範囲で炭層がひろがる。

周壁溝　住居跡南東部分で削平のため一部途切れる部分を除き、整際を全周する。幅20cm前後、深度は床面から約5cmを測る。

排水溝　住居跡南西部の周壁溝から西方向へ2.9mにわたって検出した。幅約50cm、検出面からの深度は約15cmを測る。等高線に直交してほぼ直線的に斜面下方に掘削されている。周壁溝に流れ込んだ水を屋外に排水するための施設である。



出土遺物　壺(79)・蓋(78)・甕（81～83）・高杯(84)・把手(80)などが出土している。

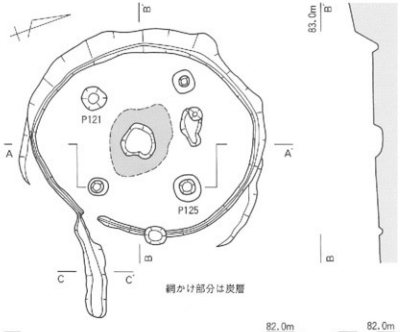
時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

SH2（第23図）

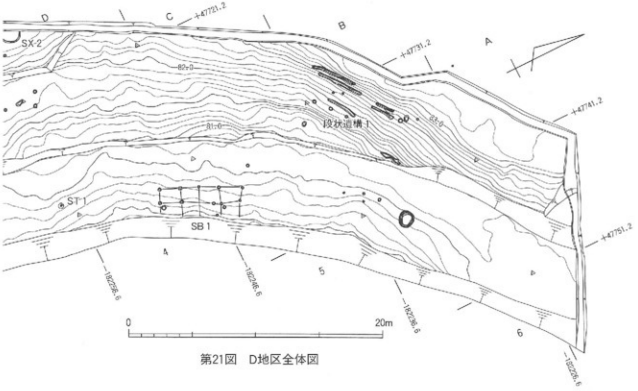
検出状況　調査区南端の西側に位置する。住居跡の東側は棚田造成時の削平のため破壊されていた。北西の一部を炭土抗1に切られる。また、SH3と重複する。SH3は焼失住居で、焼失後人為的に埋め戻した後、当住居を構築している。

形状・規模　平面形は円形を呈する。規模は、直径8.9mを測る。検出面から床面までの深度は最深部で50cmである。床面の標高は82.2m前後である。

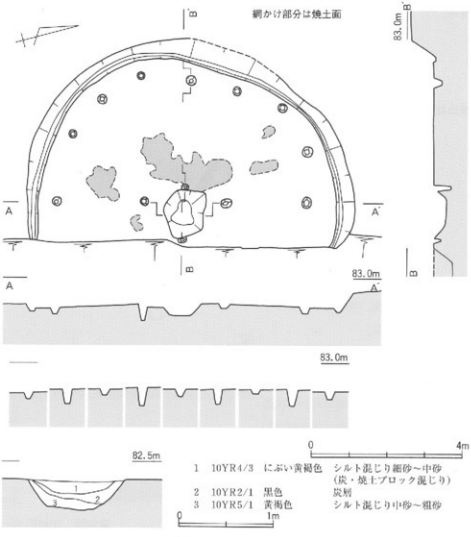
埋没状況　上層に暗褐色中砂～粗砂（細礫混じり）、下層に



第22図　D地区 SH1



第21図　D地区全体図



第23図　D地区 SH2

にぶい黄褐色中砂～粗砂が堆積していた。上層からは多量の土器片が出土した。住居の廃絶後、土器を人為的に投棄した状況が復元できる。

屋内施設　主柱穴、中央土坑、周壁溝、焼土面を検出した。

主柱穴　住居跡の壁際に沿って1.2～1.8mの間隔で直径25cm前後の柱穴9基を検出したが、柱穴の深度が深いもの（床面から40～50cm）と浅いもの（床面から20cm前後）が交互に並ぶことから、前者を主柱穴、後者を補助的な柱穴と識別した。

中央土坑　床面中央で検出した。平面形は不整形な長楕円形を呈し、規模は1.2m×1.0mを測る。断面形は逆台形を呈し、床面からの深度は20cmを測る。埋土は3層からなり、黄褐色土が堆積した後、再度掘削し直し、炭が充満する層が形成され、炭・焼土ブロック混じり土で埋没していた。

周壁溝　検出した範囲では、壁際を全周する。床面での幅約20cm、深度は約10cmを測る。

焼土面　中央土坑の周囲を中心に5箇所で焼土面を検出した。平面形は不整形である。被熱で赤化、硬化している。

出土遺物　壺（85・86）・甕（87）・高杯（89～91）などが出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

SH3（第24図）

検出状況　調査区南端の西側に位置する。住居跡の大半は畑田造成時に大きく削平されている。SH2と重複する。

焼失住居　当住居跡は焼失した状況で検出された。住居跡北西部で床面直上から放射状に広がる炭化材を検出した。

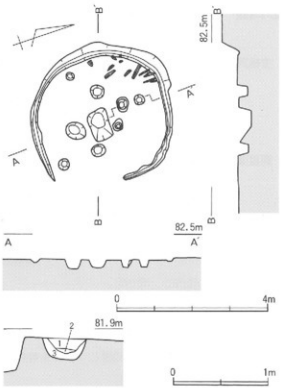
形状・規模　平面形は円形を呈する。規模は、直径約3.8mを測る。検出面から床面までの深度は最深部で30cmである。床面の標高は81.8m前後である。

埋没状況　上層に暗褐色シルト混じり細砂～中砂（30cm大の地山ブロック混じり）、下層に炭化材・炭・焼土混じりの灰褐色細砂～中砂が堆積していた。下層については当住居跡の焼失に伴う堆積、上層は人為的に埋め戻したものである。

屋内施設　主柱穴、中央土坑、周壁溝を検出した。

主柱穴　中央土坑を挟んで東西に2基検出した。直径30cm前後、深度は床面から45cmと65cmを測る。

中央土坑　床面中央で検出した。平面形は長楕円形を呈し、規模は0.8m×0.5mを測る。断面形は逆台形を呈し、床面からの深度は26cmである。埋土は3層からなり、最下層に炭が充満する層、その上層に赤褐色の焼土層が形成され、最後に炭・焼土ブロック混じり土で埋没していた。



第24図　D地区 SH3

周壁溝　南東側の一部が削平されていたが、ほぼ全周する。床面での幅約20cm、深度は約5cmを測る。

出土遺物　土器の細片が出土しているが、図化できるものはなかった。

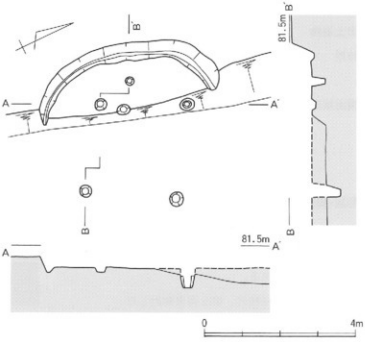
時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

SH4（第25図）

検出状況　調査区南半の中央に位置する。住居跡の大半は棚田造成時に大きく削平されており、床面はわずかに西側で遺存するのみである。

形状・規模　平面形は円形を呈するものと考えられる。規模は、直径6.5m前後に復元される。検出面から床面までの深度は遺存状況のよい西側で30cmを測る。床面の標高は80.9m前後である。

埋没状況　上層に暗褐色シルト混じり細砂～粗砂、下層に褐色シルト混じり極細砂が堆積していた。



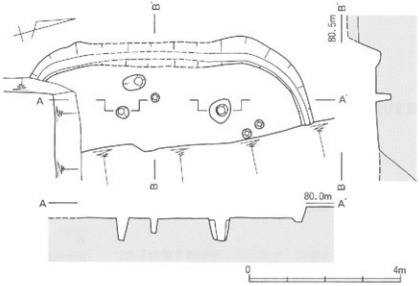
第25図　D地区 SH4

屋内施設　主柱穴、周壁溝を検出した。

主柱穴　4基検出した。掘り方は直径30cm前後、深度は検出面から15～40cmを測る。

周壁溝　削平のため西側の一部のみ残存する。床面での幅30cm前後、深度は約10cmを測る。

出土遺物　壺(95)、甕(93)、高杯(94)と砥石(S5)が出土している。



第26図　D地区 SH5

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

SH5（第26図）

検出状況　調査区南半の東端に位置する。住居跡の大半は棚田造成時に大きく削平されている。炭土坑2に西辺を切られる。また、住居跡南端については、電柱があり、調査できなかった。

形状・規模　平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は、両端の確認できる西辺で6.5mを測る。検出面から床面までの深度は最深部で60cmを測る。床面の標高は79.6m前後である。

埋没状況　上層に黒褐色中砂～粗砂（細礫混じり）、下層に暗褐色シルト混じり中砂～粗砂が堆積していた。

屋内施設　主柱穴、周壁溝を検出した。

主柱穴　2基検出した。掘り方の直径は約30cmと60cm前後で、深度は床面から約70cmを測る。

周壁溝　削平のため西側の一部のみ残存する。床面での幅30cm前後、深度は約10cmを測る。

出土遺物　壺(96・97)、甕(98)、鉢(99)、高杯(100・101)などが出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

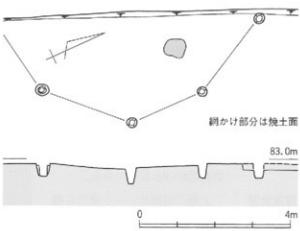
SH11（第27図）

検出状況　調査区南半の西端に位置する。棚田造成時に床面まで削平され、わずかに柱穴が遺存するのみである。

形状・規模　床面まで削平されていることから、平面形は不明であるが、主柱穴の配置から周辺の住居跡と同様に円形を呈するものと推定される。

屋内施設　主柱穴、焼土面を検出した。

主柱穴　4基検出した。掘り方の直径は30～40cm、深度は検出面から40cm前後を測る。SH2



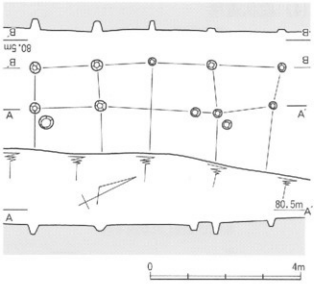
第27図　D地区 SH11

などと同様の壁際に主柱穴が配置されるものと推定される。

焼土面　平面形は楕円形で、50×60cmの範囲で被熱のため赤化、硬化していた。

出土遺物　壺(103)、甕(104)などが出土している。

時期　出土遺物から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。



第28図　D地区 SB 1

(2) 掘立柱建物跡

SB 1 (第28図)

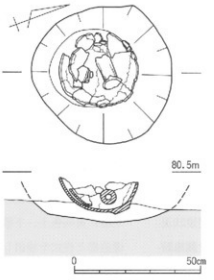
検出状況　調査区中央に東端に位置する。建物跡の東側は棚田による削平のため破壊されていた。

形状・規模　主軸はN27°Eを示す。桁行1間(1.1m)以上、梁行4間(6.5m)の総柱建物に復元される。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行1.1m、梁行1.6mである。

柱穴　掘り方の平面形は円形を呈する。直径は30cm前後を測る。検出面からの深度は20～40cmを測る。

出土遺物　柱穴埋土から壺(105)の底部が出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。



第29図　D地区 ST 1

(3) 土 器 棺

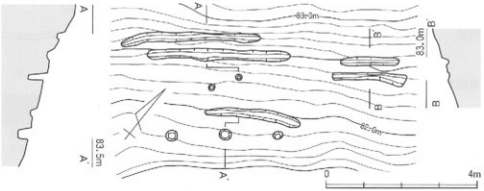
ST 1 (第29図)

検出状況　調査区中央東端に位置する。

形状・規模　掘り方の平面形は、不整形な円形を呈する。規模は、直径約55cmで検出面からの深度は7cmを測る。

埋設状況　掘り方ほぼ中央に大型の壺(108)を正位に据えた状況で検出した。壺の内部には高杯(109)の杯部と脚柱部が落ち込んでいた。高杯の脚端部は全く失われている。高杯は、土器棺の蓋に転用したものである。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。



第30図　D地区 段状遺構 1

(4) 段状遺構

段状遺構1（第30図）

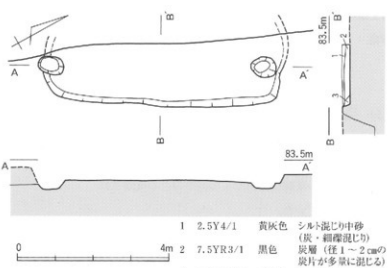
検出状況　調査区北側の西半に位置する。等高線に平行な5条の溝群と柱穴列からなる。

規模　溝の規模は、最大のもので3.9m、幅は20～30cmを測る。検出面からの深度は最深部で10～15cmを測る。柱穴は直径20～30cm、検出面からの深度は最深部で40cmを測る。

埋没状況　上層に褐色中砂～粗砂が堆積しており、一度の堆積で埋没した状況を示す。

出土遺物　溝の埋土から壺(106)の体部が出土している。

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。



第31図　D地区 炭土坑1

(5) 炭 土 坑

炭土坑1（第31図）

検出状況　調査区南半の西端で検出した。西半分については調査区外である。SH2を切る。

形状・規模　平面形は長方形を呈するものと推定される。南端には煙道部が付く。規模は長軸方向に6.5m、その直交方向は1.8m以上を測る。検出面からの深度は約20cmである。底面は平坦である。

埋没状況　上層に黄灰色土、下層に直径1～2cmの炭片からなる炭層が堆積していた。

付属施設　煙道部と柱穴を検出した。

煙道部　南短辺に煙道部が付く。壁際の底面を一段掘り込んで南側に緩やかに傾斜しながら立上る。底面を掘り込んだ箇所を中心に被熱で赤化していた。

柱穴　突出部の反対の北短辺際に位置する。被熱で赤化しており、柱穴ではなく燃焼施設の一部の可能性も考えられる。

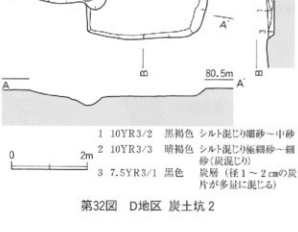
出土遺物　上層から瓦器椀が出土している。

時期　出土遺物から、鎌倉時代と考えられる。

炭土坑2（第32図）

検出状況　調査区南半の東側で検出した。SH5を切る。

形状・規模　平面形は長方形を呈する。南端には煙道部が付く。規模は長軸方向に3.2m、その直交方向は2.0mを測る。検出面からの深度は最深部で35cmを測る。底面は平坦である。



第32図　D地区 炭土坑2

埋没状況　上層に暗褐色土、下層に径１～２cmの炭片からなる炭層が堆積していた。

付属施設　煙道部を検出した。

煙道部　南短辺に煙道部が付く。壁際の底面を一段掘り込んで南側に緩やかに傾斜しながら立上る。底面を掘り込んだ箇所を中心に煙道部は被熱で赤化していた。

出土遺物　全く出土していない。

時期　炭土坑１と同様の堆積状況を示すことから、鎌倉時代と考えられる。

(6) 集石土坑

SX２

検出状況　調査区中央西端で検出した。西半は調査区外に広がる。

形状・規模　平面形は円形を呈するものと考えられる。直径は約1.8m、検出面からの深度は、最深部で15cmを測る。底面は平坦である。

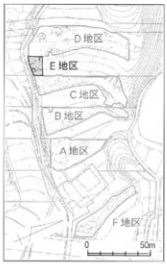
埋没状況　拳大の礫が多量に放り込まれていた。礫の中には、被熱したものも認められた。

出土遺物　甕(107)の口縁端部が出土している。

時期　出土遺物から、弥生時代後期初頭と考えられる。

第５節　E地区

概要　検出した遺構は、竪穴住居跡、段状遺構、柱穴である（第34図）。



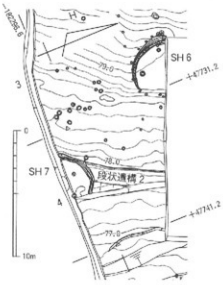
第33図　E地区位置図

(1) 竪穴住居跡

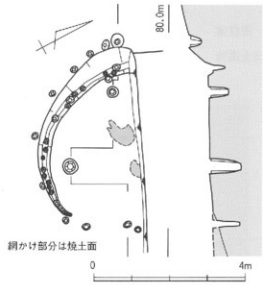
SH６（第35図）

検出状況　E地区北西端に位置する。北半は調査区外に延び、東部は削平されている。

形状・規模　平面形は円形を呈し、直径は約５m程度と推定される。検出面



第34図　E地区全体図



第35図　E地区 SH６

から床面までの深度は最深部で50cmを測る。床面の標高は78.9m前後である。

埋没状況　灰黄褐色土が堆積していた。自然に埋没したものと考えられる。

屋内外施設　主柱穴、周壁溝、焼土面、杭痕を検出した。

主柱穴　2基を検出した。平面形はともにほぼ円形で、掘り方の直径は約30cmと約40cmで、床面からの深度65～70cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕の直径は20cmと22cm、深度はともに60cmを測る。柱穴の心々間の距離は2.3m、2基の柱穴はN40°Wを指す。

周壁溝　床面を巡る円形の平面形で約5mを検出した。北は調査区外に延び、東は削平されている。幅は最大で約30cm、床面からの深度は最深部で13cmを測る。溝内からは杭痕を多数検出した。

焼土面　中央付近と推定される位置に3カ所検出した。

杭跡　周壁溝内だけでなく、住居跡外周に沿って0.5m～1.5mの不等間隔で並ぶ。平面形はほぼ円形で、直径10～20cm、深度30～40cmを測る。

出土遺物　甕(150・151)、壺(153)、高杯(152)などが出土している。

時期　弥生時代後期前半と考えられる。

SH7（第36図）

検出状況　E地区南端に位置する。住居跡の南半は調査区外に延び、東端は棚田造成時の削平のため破壊されている。段状遺構2と北接する。

焼失住居　当住居跡は焼失した状況で検出された。住居跡床面全域で放射状に広がる炭化材が検出された。

形状・規模　平面形は円形を呈するものと考えられる。規模は、推定で直径約6.0mである。検出面から床面までの深度は最深部で43cm、床面の標高は77.5m前後である。

埋没状況　上層ににぶい黄褐色細砂～粗砂、中層に厚さ10cm内外の炭化材・焼土層、下層ににぶい黄褐色細砂～中砂が堆積していた。なお炭化材は、床面より約10cm上位の下層上面で検出されている。中層については、当住居跡の焼失に伴う堆積、上層については自然に堆積したものである。

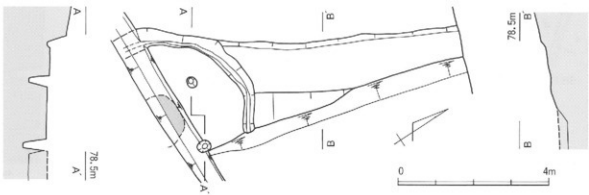
屋内施設　主柱穴、中央土坑、周壁溝を検出した。

主柱穴　2基検出した。掘り方の直径30～40cm、床面からの深度は55～65cmを測る。

中央土坑　調査区南壁の断面で確認された。調査区南壁断面で幅1.1m、深さ30cmを測る。上層に暗褐色土、下層に炭層が堆積する。

周壁溝　検出した範囲では、壁際を全周する。幅約30cm、深度は床面から約5cmを測る。

出土遺物　床面直上から完形の小型鉢(158)、中型鉢(157)などが出土している。



第36図　E地区 SH7・段状遺構2

時期　出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

(2) 段状遺構

段状遺構2（第36図）

検出状況　E地区東半に位置する。北側は調査区外に延びる。東端は棚田造成時の削平のため破壊されている。SH7と南接する。

形状・規模　遺構の方向はほぼN20°Eで、遺構検出面の等高線とほぼ平行する。規模は、東西幅約0.7～1.3m、南北長約5.5mを測る。

出土遺物　遺物は全く出土しなかった。

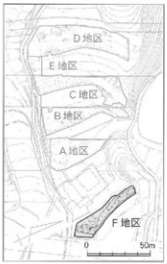
時期　SH7と一連のもので、同時期の弥生時代後期前半と考えられる。

(3) 柱　穴

調査区全域で約30基検出した。しかしながら、建物を復元するに至っていない。直径20～30cm前後で、埋土は灰色のものと灰褐色のものがある。

第6節　F地区

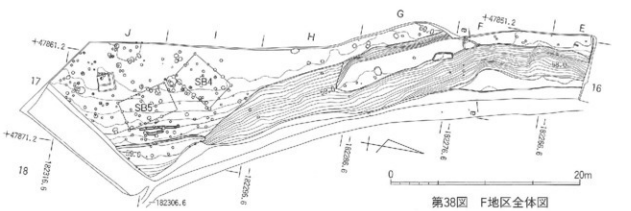
F地区は調査区の東端にあたり、遺跡の立地からすると段丘の縁近くになる。赤堀邸直下の田2枚分である。南北に細長い最大幅15m、最大長60m、調査対象面積740㎡を調査した。F地区北半部は弥生時代後期、南半部は鎌倉期の遺物遺構の出土が見られた。



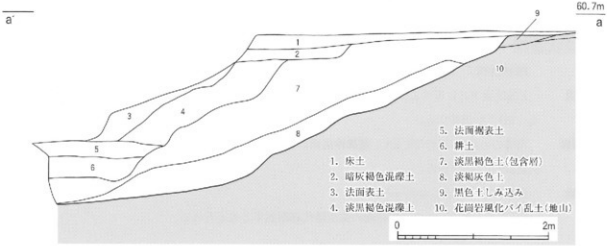
第37図　F地区位置図

北半部　北半部の基本的な層位は、表土、床土、淡黒褐色混礫土（遺物包含層2次堆積層）、淡黒褐色土（遺物包含層）、花崗岩風化バイラン土（地山層）からなる。調査区の北端に近い斜面地から幅10m、長さ4mの半円状の浅い谷状の窪みに大量の弥生後期土器が投棄された状態で出土。段状遺構等の存在を想定しながら精査に努めたが遺構は検出できなかった。出土土器は破片となって出土したので、完形に復し得るものはない。

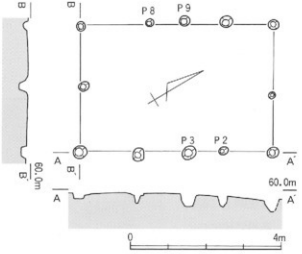
南半部　南半部の基本的な層位は、表土、床土、暗褐灰色土、暗灰褐色



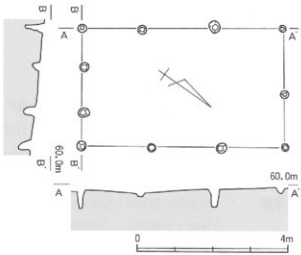
第38図　F地区全体図



第39図　F地区 北半部土層断面図



第40図　F地区 SB４



第41図　F地区 SB５

土（遺物包含層）、花崗岩風化バイラン土（地山層）からなる。遺構検出面は、地山層上面となるが、遺物包含層の染み込みにより、地山をやや削り込んで遺構検出が明確となる。検出された遺構は柱穴と思われる穴が100穴以上見られたが、復元できたのは掘立柱建物跡SB４、SB５の２棟である。SB４は２間×４間（3.35m×5.1m）、SB５は２間×３間（3.15m×5.35m）である。ただし、SB５の南東に面する短辺が３間になっていることから、いずれかの柱間が入口になるものと推定される。また、SB４の南東に面する長辺の柱間が一見不揃いのように見えるが、北から柱間をみると1.3m、0.9m、1.3m、1.6mで、P２とP３との間が入口になる可能性がある。また、対称する長辺のP８とP９の間が0.9mであることから、SB４の両長辺に出入り口があったものと考えられる。

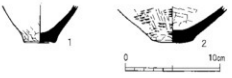
なお、SB４の長軸が北東を、SB５の長軸が北西を向いているが、SB４は地形に直交し、SB５が地形に対して平行に建てられていることから、同時に存在した可能性を否定できない。

時期　柱穴内から瓦器片が出土しているので鎌倉期の建物と推察される。

第4章　遺物

第1節　弥生土器

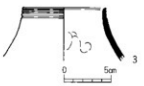
中津原遺跡で出土遺物の中心になるのが、弥生土器である。弥生土器は全ての地区の包含層から出土し、F地区を除く遺構からも出土している。



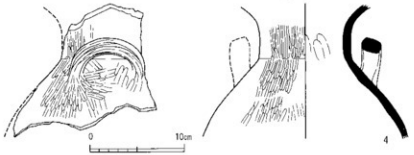
第42図　A地区出土土器

A地区　A地区は竪穴住居跡が1棟と柱穴などの遺構が若干検出されたにすぎず遺物の出土も極端に少ない。1はA2地区の包含層から出土した弥生土器で、内外面や底面ともナデ調整されている。小型の壺底部であろうか。2はA2地区の機械掘削時に出土したもので、外面は粗いタタキ調整ののち、タテ方向のナデが見られる。底部底面は僅かに凸状をなす大型の甕底部である。

B地区　B地区は北寄りで段状遺構や柱穴が検出されたが包含層も薄く遺物量は少ない。3はSK25から出土した壺口縁部である。口径は8.8cmと小さく、口縁外面に擬凹線3条を施し、胎土は精良な台付無頸壺と考えられる。4は段状遺構4のP403から出土した把手付壺である。把手は2個1対で、口縁部および胴部下半は欠失している。外面は丁寧なヘラミガキが施され、赤茶色であることからベンガラが塗布されている可能性がある。把手付壺の系譜の中では最も新しい時期の所産で、V－0期と考えられる。



第43図　B地区SK25出土土器

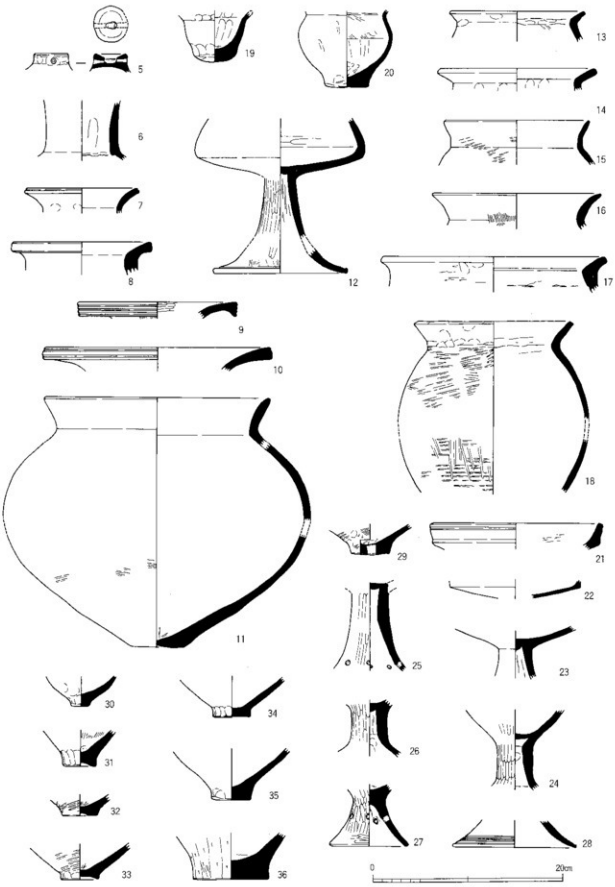


第44図　B地区段状遺構4 P403出土土器

包含層からは蓋、壺、甕、鉢、高杯、器台が出土している。5は天井部上端に水平方向に貫通孔がある蓋である。6～12は壺で、6は長頸壺、9・10は口縁端部に擬凹線をもつ広口壺で9は口縁端部が垂下しており、後期のものである。11は大型で無文の短頸壺である。12は台付無頸壺と考えられ、外面は丁寧にミガキが施されている。V－2期の典型である。13～18は甕である。14は胴部下半まで復元できるもので、外面にタタキを残すが下半は擦り消された部分がある。19・20は鉢である。19は口縁端部を欠く小型品である。胎土には雲母が目立ち搬入品の可能性が高い。20は胴部がやや張るタイプで、V－0・1期である。21～28は高杯である。21は杯部外面に擬凹線を残す。23は杯部と脚柱部の接合は円板充填によるものである。29は底面に1孔を有する有孔鉢である。30～36は各種の底部である。31は底部屈曲部に押さえが顕著であり、後期後半の可能性がある。

C地区　C地区では北寄りに竪穴住居跡や段状遺構が検出され、中央や南寄りに掘立柱建物跡が検出され、A・B地区に比べれば遺物は多く出土している。

SH8　37～39は壺で37は口縁端部が垂下する。40～44は甕である。43は全体が赤変し、二次焼成の可能性がある。45・46は鉢である。48は表裏に結土の継ぎ目があり、底部付近にユビオサエがある。

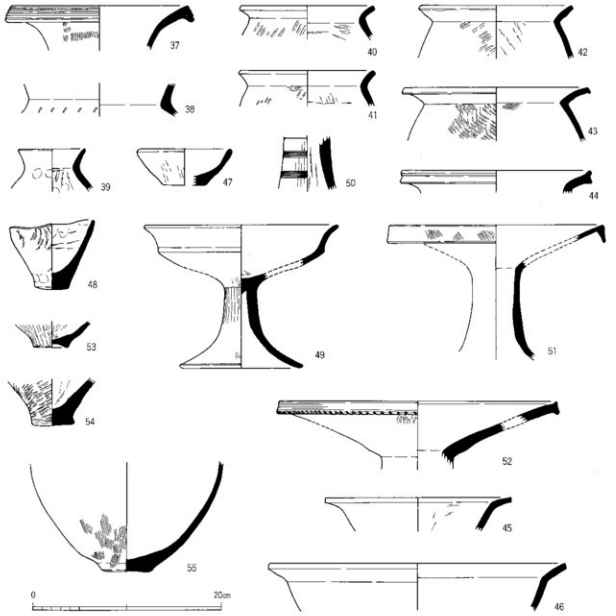


第45図　B地区包含層出土土器

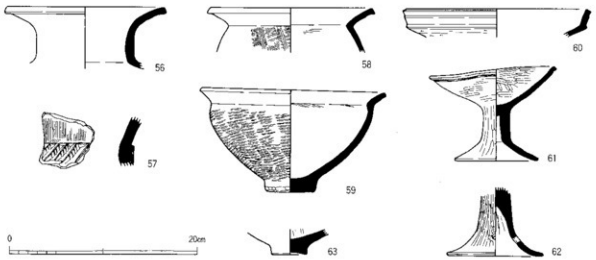
49・50は高杯で、49は杯部はヨコナデ、脚部は外面ヘラミガキと内面ケズリがみられ、丁寧なつくりである。50は脚柱部外面にクシ描直線文が3帯みられ、中期的ではあるが後期Ⅴ－1までのものである。51・52は器台である。51は口縁端部が垂下するもので、後期初め。52は上下端が拡張され下端に刻みをもつ。53～55は底部である。

段状遺構3　56・57は壺で56は広口壺でⅤ－0～2期である。57は凸帯上にクシ圧痕が施されⅣ－3・4期である。58はタタキをもつ甕、59は外面にタタキを残す鉢である。60～62は高杯で61は口縁外面に凹線文を施すもので、時期は後期初頭から前半頃、中部瀬戸内系の土器である。

包含層　64～67は壺で64はⅣ－4～Ⅴ－0期の広口壺。66は3条のクシ描波状文をもち、Ⅳ－4～Ⅴ－0期の台付無頸壺である。68・69は甕で、69は外面にタタキが残りⅤ－0期に特徴的なものである。70はミニチュアの把手付鉢である。71～74は高杯である。71は瀬戸内系のもので、赤色精良粘土が塗られたか、或いは表面が剥離した杯部である。72は中部瀬戸内系のもので、Ⅴ－0期頃のもので



第46図　C地区SH 8 出土土器

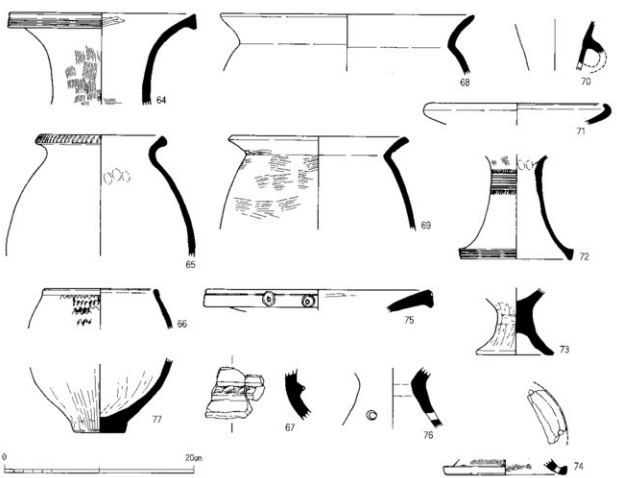


第47図　C地区段状遺構3出土土器

ある。75·76は器台である。75は口縁端面に竹管文円形浮文を2個1対に配したものである。

D地区　D地区では南寄りに竪穴住居跡が集中し、中央には掘立柱建物跡、土器棺などの遺構が検出されたほか、包含層の堆積も厚くそれぞれの遺構や包含層から遺物が出土した。

SH1　78は2孔1対の小円孔をもつ壺の蓋である。79は口縁がやや開き気味の壺で口縁端部に擬凹線3条、体部にクシ状工具による刺突文2段があり掻磨的な文様をもつ。80は壺の把手である。81～83

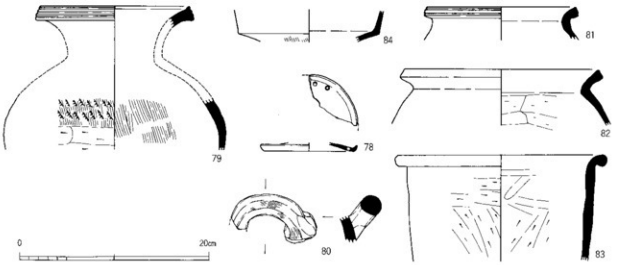


第48図　C地区包含層出土土器

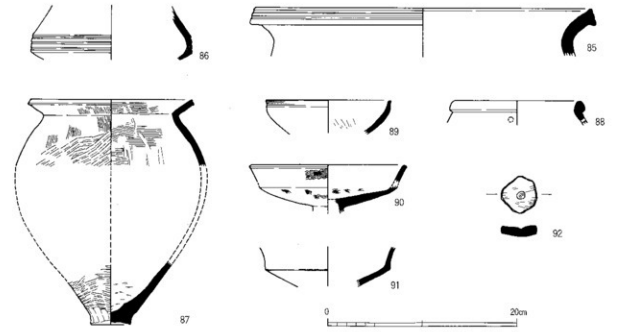
は甕で82は形態や調整から中部瀬戸内からの搬入品の可能性があり、時期はⅤ－0・1期である。83は表裏とも粗いケズリがみうけられる胴長の甕である。84は杯部に屈曲部をもつ高杯で口縁にかけて立つことから瀬戸内の影響を受けているものである。

SH2　85･86は壺で86は台付細頸壺で瀬戸内沿岸に多くみられ、Ⅴ－0・1期であろう。87は浅く太いタタキがみられる甕で、Ⅴ－0・1期と考えられる。88は台付鉢で中期的な要素を残し、Ⅳ－4～Ⅴ－0期のものであろう。89～91は高杯で89は椀型でⅤ－0期、90はクシ描波状文を有し精製されたもので、Ⅴ－0・1期、91は稜が明瞭でⅤ－1期と考えられる。92は中央に孔を穿つ途中の紡錘車未製品である。

SH4　93は口縁が小さく開く壺、94は口縁外面に凹線文をもつ甕で中部瀬戸内的なものでⅤ－0・1期であろう。95は器台か壺の口縁部で垂下部に擬凹線2条と竹管文円形浮文がみられ、Ⅴ－2期頃と考えられる。

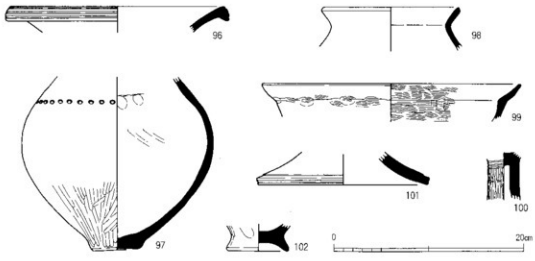


第49図　D地区SH1出土土器



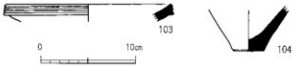
第50図　D地区SH2出土土器

第51図　D地区SH４出土土器



第52図　D地区SH５出土土器

SH５　96は広口壺口縁で３条の擬凹線が施され、Ⅴ－０・１期である。97は肩部に竹管文が施されているものである。98はⅤ－０・１期の甕である。99はⅤ－０・１期の鉢で二次焼成を受けて赤変している。100は脚柱部上端にヘラ描沈線を施す高杯である。101は脚端に擬凹線が施された器台と考えられる。この他、102は上げ底の底部でⅤ－０・１期の所産と考えられる。



第53図　D地区SH11出土土器

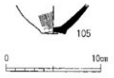
SH11　103は口縁端部に擬凹線が３条施されたⅤ－０・１期の甕である。104は底部がくびれず直線的なことから瀬戸内系かもしれない。

SB１　105は底部下半部が僅かに屈曲するもので後期前半のものである。

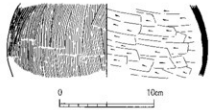
段状遺構１　106は甕の胴部で、外面はタテ方向のハケ目調整、内面はヨコ方向のケズリが見られる。

SX２　107は口縁端部に２条の擬凹線を施す甕口縁部で、中部瀬戸内的なものでⅣ－４～Ⅴ－０期である。

ST１　108は土器棺の身、109は蓋として出土した。108は大型の壺胴部下半で表面にはヘラミガキが施されている。109は杯部と脚柱部の接合は内板充填法によるもので、Ⅴ－０・１期である。

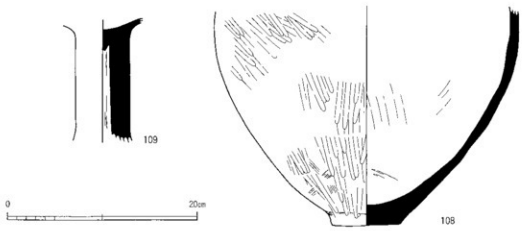


第54図　D地区SB１出土土器



第55図　D地区段状遺構１出土土器

第56図　D地区SX２出土土器



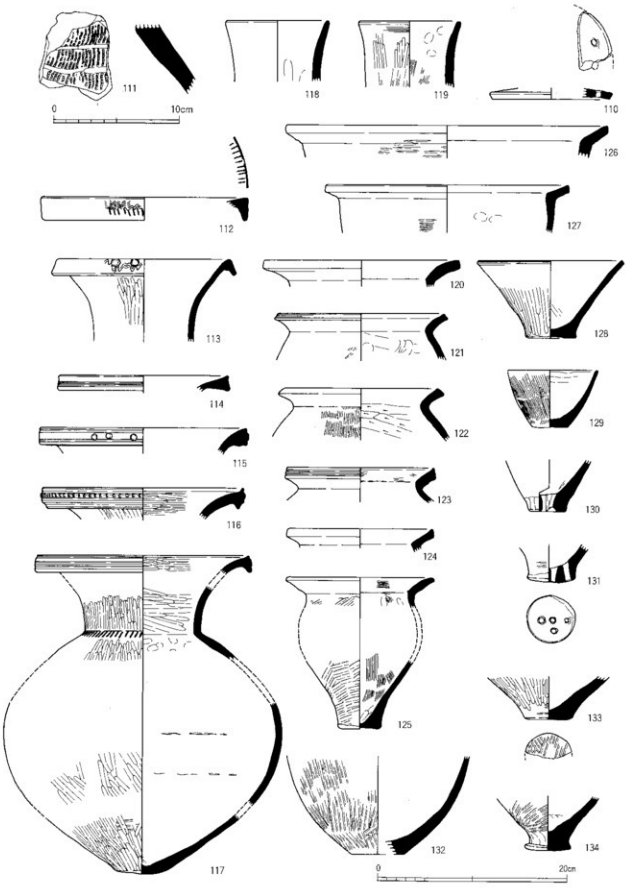
第57図　D地区ST1出土土器

包含層　110は無頸壺の蓋である。111～119は壺で、111は大型壺上半部で連続刺突文があり、刺突文間にミガキがある。112～117は広口壺で112は口縁端部が垂下しⅣ－3期である。114は口縁端部が上方に肥厚し外面は2条の擬凹線が施されるもので四国からの搬入品と考えられる。113は口縁端部が垂下し波状文＋円形浮文が施されⅤ－2期である。115はⅤ－0の典型で、116は凹線文の入れ方や拡張方向が中期的でありⅣ－3期と考えられる。117は口縁端部に3条の擬凹線、頸胴部間クシ状工具による刺突列点文を施し、中期的な要素を残す。Ⅳ－4かⅤ－0期と考えられる。118・119は長頸壺で119は断面が肥厚するものでⅤ－2期であろう。120～125は甕で、120は中期的なものでⅤ－0期である。121は口縁端部を強くなでており瀬戸内的なものでⅤ－1期。123は古曽部遺跡や表山遺跡、上天神遺跡で類例がありⅤ－0・1期である。124は西ノ辻Ⅰや表山遺跡で類例があり、Ⅴ－0・1期である。125は体部に比べて口縁が大きく開くもので、体部にはタタキ目が残る。126・127は大型や中型の鉢でタタキがみられる。128は底部からほぼ直線的に広がる鉢で後期初頭。129は若干すぼまる小型の鉢である。130は1孔の有孔鉢、131は4孔の有孔鉢である。132～134は底部である。135～143は高杯である。135～137は杯部が僅かに外反し精良な土で丁寧につくられており、Ⅴ－1期と考えられる。138・139は脚柱部上端にヘラによる沈線がめぐる。時期はⅤ－0・1期である。142は脚部に凸帯を有し、ヘラ状工具で押えられている。143は脚端部が拡張されたⅣ－4期のものである。144～149は器台である。口縁端部に円形浮文を施すものも目立つ。146は口縁端部が垂下し、144は上下拡張。145や147は僅かに下方に拡張している。149は脚端外面に2条の擬凹線が施されている。

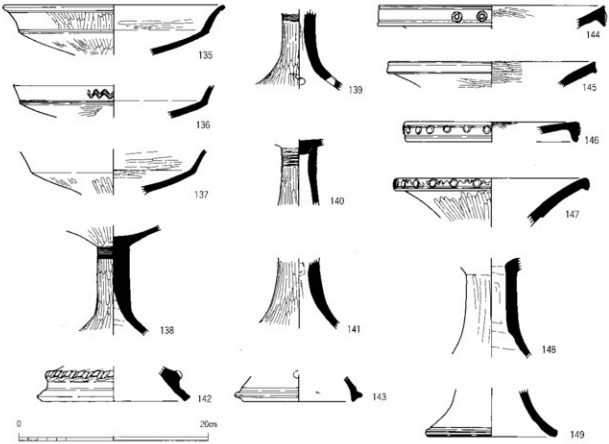
E地区

SH6　150は壺か甕の口縁部、151は小さく開く甕である。152は脚端外面に擬凹線を施す高杯である。153は重心を下方にもつ細頸壺の底部で、Ⅴ－2・3期頃と考えられる。

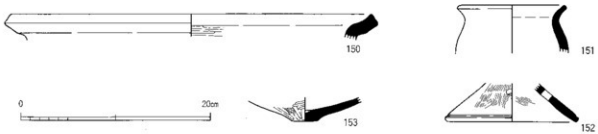
SH7　154～156は壺で154は垂下した口縁外面にヘラ描沈線文上に4個1対の円形浮文が施される。155は口縁端部がやや内湾し、瀬戸内の影響を受けたものか。時期はⅤ－0・1期頃と考えられる。156はクシ描直線文とクシによる列点が交互に施文され、中期的でⅣ－3期と考えられる。157は口縁が僅かに外反し、体部上半に最大径があり幅の広い底部をもつ。外面は赤褐色を呈し二次焼成したもので、形態は朝鮮半島系の原三国時代の土器を想起させるものである。158は小型の鉢である。159は台付鉢の脚部かもしれない。163は大型の甕底部であろう。



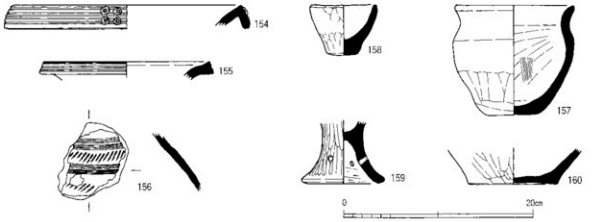
第58図　D地区包含層出土土器1



第59図　D地区包含層出土土器2



第60図　E地区SH6出土土器



第61図　E地区SH7出土土器

F地区出土遺物

F地区出土の弥生土器は、そのほとんどがF地区北半部の遺物包含層中出土のもので弥生時代後期の土器である。

壺　161～170は壺である。161、162は外反する口縁部の端部をあまり拡張せず文様を持たない。161の外面は縦方向のハケ調整後、縦方向のミガキが施され、内面は横方向のミガキ。162は摩滅が著しい。163は水平に開く口縁端部の下端に粘土帯を付加して垂下させ、外端面と上端面に櫛描波状文を描き、外端面にはさらに円形浮文3個を1単位として間隔をおいて貼り付ける。数少ない加飾土器である。164は直立する筒状の頸部にほぼ水平に開く口縁部をもち、口縁端部を上へ強く摘み出す。口縁部内面は横方向にミガキ、外面はナデのままである。頸部は外面を縦方向にミガクが内面は横方向のハケ目調整のままである。この164は、器形としては東阿波型土器の広口壺に近似するが、搬入品ではない。165は短い頸部に外反する短い口縁部を持つもので口縁端部を上下に摘み出し、口縁外端面には2条の退化した凹線文が見られる。外面は縦方向のハケ調整、内面はナデるが、胴部内面は横方向に削る。165の胎土に結晶片岩が含まれていることから搬入土器である。166は頸部と胴部の境に断面三角形の1条の凸帯を貼付け、その直下に櫛描波状文を描く中期的な土器である。摩滅が著しい。167は外反する口縁部の上端部をわずかに摘み出すタイプで、一見、外端面に1条の退化した凹線文を持っているように見える。168はやや外開きの短い頸部に少しだけ外反する短い口縁部をもつもので口頸部境外面に1条の沈線を有し、沈線直下からは縦方向のハケ調整が見られる。あとはナデのみである。169は壺としても良いような外開きの短い口縁部を持つものである。口縁内端部をわずかに摘み出す。口縁部付近はナデのみで、胴部外面は縦方向のハケ調整後ナデて仕上げ、胴部内面は頸部付近まで横方向に削る。170は短く直立する口縁部を有するもので、口縁端部をわずかに内側に摘み出す。外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整後ナデて仕上げている。

甕　171～176は甕である。171、174は屈曲して開く口縁部の上端を摘み上げ、端部に退化凹線を持つもので、174では屈曲した頸部の下端まで削りが見られる。172、173は屈曲した口縁部の端部をやや丸く納められたもの、175、176はゆるく外反する口縁部を持ち、端部が丸く納められたものである。頸部下の胴部内面の調整が172のみハケ調整であとはすべて横方向のケズリである。また、175の胴部外面に右上がりの太筋のタタキが見られる。

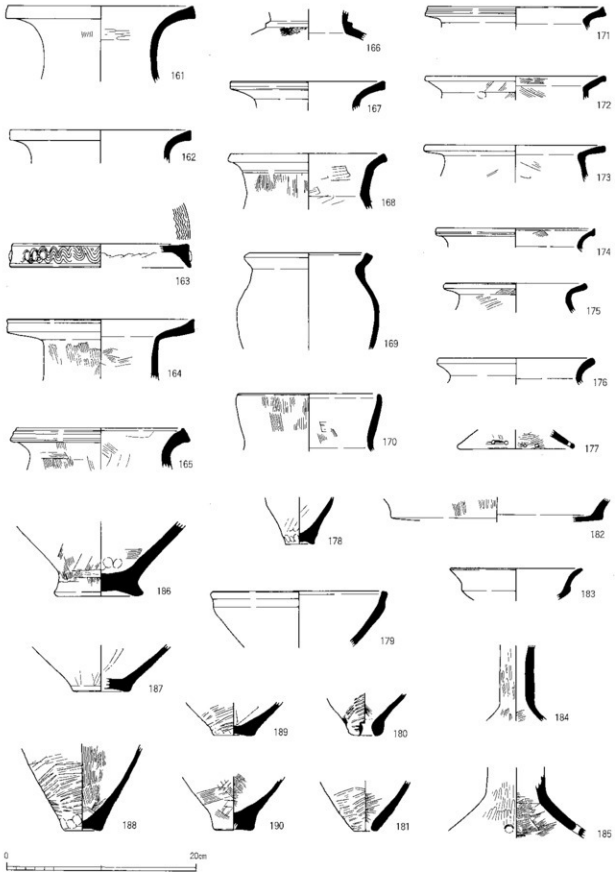
蓋　177は壺の蓋の破片である。外面はミガキ、内面は粗いハケ調整である。2孔一対の穴がある。178は手捏の小形の鉢である。高台状に底部外端を摘み出し、体部は直線的に開く。179は直線的に開く体部の上端を上方へ摘みだすように内外から強く指で押さえていることから、内湾気味に見える。摩滅が著しい。

有孔鉢　180、181は有孔鉢の底部である。尖底ぎみの底部から、直線的に開く体部となる。外面は右上がりのタタキ、内面は粗いハケ調整であるが、181の底部内面下端は削られている。

高杯　182、183共に皿形杯部に外反する口縁部が付く高杯である。口縁部の破片が小さいため、復元径が正確ではない。184は筒状脚部の破片である。他の小片においても脚部は筒状のものが見られる。

器台　185は器台脚部の破片である。

底部　186、187は壺の底部である。186は外面ハケ調整、内面はナデ、底部内面は指で強く押さえられている。187の外面はミガキ、内面はハケ調整後ナデている。なお、186、187共に底部外底面がケズ



第62図　F地区出土土器

リにより上げ底気味になっている。188、189、190は外面タタキの底部である。いずれも内面はハケ調整、底部内底面は強い指押さえだが、189の内底面は刺突具による押さえ、190の底部外底面は削る。

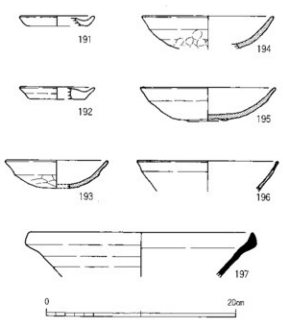
第2節　中世土器

中津原遺跡では中世の遺構は窯跡や炭土坑、掘立柱建物跡が検出されており、その周辺部の包含層からも土師器、須恵器、瓦器が出土している。これらの内、図化できるものはB・C・D地区から出土したもので、僅かに7点である。

土師器

191はB地区の窯跡付近から採集された小皿である。直径7.8cm、器高1.1cmを測り、皿の中心部は盛り上がるものである。

192はB地区の茶褐色包含層から出土した土師器小皿である。直径7.8cm、器高1.3cmを測り、器壁は1.0cmと厚く、体部外面中程で若干の成形による段がみられる。また皿の中心部は191程極端ではないものの盛り上がるものである。



第63図　中世土器

瓦器

193はB地区の茶褐色包含層から出土した破片の皿である。口径10.8cm、器高3.0cmを測り、器壁は0.4cmで体部外面中程で若干の成形の境がみられる。外面上半は丁寧な調整により外反し、下半は横方向に削られている。

194はB地区の窯跡周辺の包含層から出土した椀の破片である。口径13.8cm、器高（残存）3.5cmを測り、器壁は0.4cmの口縁外面付近で若干の成形の境がみられ外反している。また内面中心付近は螺旋暗文が施されている。

195はC地区の窯跡前面のP348から出土した完形品の椀である。口径14.2cm、器高3.6cmを測り、器壁は0.5cm、口縁外面付近で若干の成形の境がみられ外反している。また内面中心付近は螺旋暗文が施されている。

196はD地区の炭土坑1の上層埋土から出土した椀の破片である。口径14.8cm、器高（残存）3.25cmを測り、器壁は0.3cm、外形体部上端部付近で若干の成形の境がみられ外反している。また内面の暗文は不明である。

須恵器

197はC地区の谷部上層から出土したこね鉢の破片である。口径23.7cm、器高（残存）4.8cmを測り、器壁は0.6cm、口縁端部は上部に拡張され、体部外面には粘土の輪積み痕が見られる。内面上端部付近で若干の押さえによる凹みがみられる。これは東播磨系こね鉢で13世紀後半と考えられる。

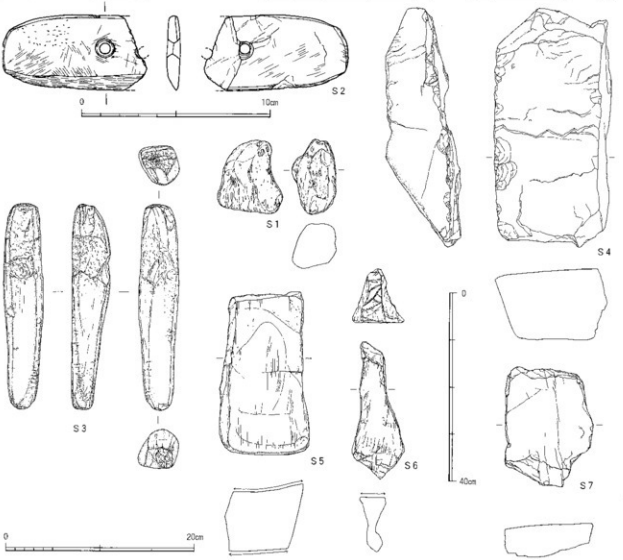
第3節　石製品

S2は緑泥片岩製の石包丁の破片で片面に刃部をつけ、切断面に孔が観察されることから2孔のものと考えられる。左図の左孔では一対の孔に向かって稜が摩滅し、右図の孔は上部の稜が摩滅していることから一方向にひもを通したものと考えられる。この遺物からこの集落の人々による稲作が裏付けられる。S1は軽石の一辺を摩滅した痕跡がある。S3は端部よりに敲打痕跡を残す細長い結晶片岩製の製品である。長軸の両端には明瞭な敲打痕が認められる。S5は上下2面を砥石として使用され、S6は上面のみ研がれたものである。

S4とS7は半迴面を持つ台石と考えられ、S4は一側縁から打撃を加えられている。

第2表　石製品一覧表

No	器種	地区	遺構	石材	幅 cm	長さ cm	厚さ cm	重量
S1	不明	B	P417	軽石	6.85	7.85	4.7	34.2g
S2	石包丁	C	SH8 北周溝	緑泥片岩	[7.6]	4	0.7	32.4g
S3	棒状石製品	C	段状遺構3　周堀溝（外側）	結晶片岩	4.3	21.8	4.1	580g
S4	台石	C	段状遺構3		24.9	50.6	15.8	27.5kg
S5	砥石	D	SH2　周堀溝	砂岩	9.6	17.25	7.5	1,870g
S6	砥石	D		砂岩	5.5	14.5	5.7	255g
S7	台石	E	SH6	砂岩	18.4	25.3	7.1	4.8kg



第64図　石製品

第４節　鉄製品

中津原遺跡のＡ地区からＥ地区までの鉄製品出土数は10点（Ｆ１～Ｆ10）、Ｆ地区の出土数は７点（Ｆ11～Ｆ17）である。この地区からはいずれも破片であり、全容を知ることはできない。

第３表　鉄製品一覧表

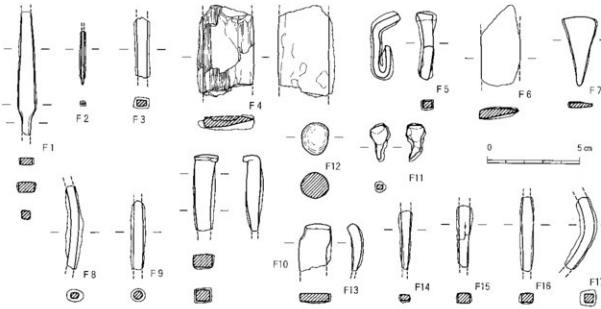
No	器　種	地区	層　位	幅　cm	長さ　cm	厚さ　cm
Ｆ１	鏃or ノミ	Ａ１	包含層	0.9	[6.65]	0.55
Ｆ２	釘	Ａ１	東壁面精査	0.15	2.9	0.15
Ｆ３	釘or 鏃or 鏡	Ｂ	包含層（主に茶褐色土）	0.55	[3.25]	0.35
Ｆ４	刀	Ｃ	灰色土	2.7	[4.95]	[0.55]
Ｆ５	つり下げ金具	Ｃ	暗灰色土	0.4	3.7	0.5
Ｆ６	不明	Ｃ	灰色土	2.1	[4.4]	0.55
Ｆ７	不明	Ｃ	谷部包含層（暗褐色土）	1.2	[3.75]	0.3
Ｆ８	釘	Ｄ	茶褐色土	0.4	[4.5]	0.35
Ｆ９	釘	Ｄ	下段農械掘削	0.5	[3.75]	0.5
Ｆ10	釘	Ｅ	包含層（褐色土）	1.05	[4.15]	0.75
Ｆ11	釘の頭？	Ｆ		1	[1.85]	1
Ｆ12	不明	Ｆ		1.2	1.4	1.25
Ｆ13	不明	Ｆ		1.6	[2.55]	0.45
Ｆ14	釘or 鏃茎	Ｆ		0.55	[3.15]	0.35
Ｆ15	釘or 鏃茎	Ｆ		0.65	[3.35]	0.55
Ｆ16	釘or 鏃茎	Ｆ		0.65	[4.05]	0.5
Ｆ17	釘	Ｆ		0.55	[3.95]	0.5

Ｆ１は断面が四角形を呈し茎が認められるため鉄鏃の可能性がある。Ｆ３は釘か鏃或いは錐と考えられる。Ｆ８、Ｆ９は断面がほぼ円形の釘。Ｐ10は頭部がＬ字状に曲げられた釘と考えられる。Ｆ４は片側に刃が作り出された刀の部分で周囲には鞘の木質が付着している。Ｆ５は２カ所が折れ曲がっており、つり下げ金具と考えられる。Ｆ６、Ｆ７は不明な鉄片である。

Ｆ地区出土の鉄製品の内、Ｆ11は頭部の錆が肥大化した釘と考えられる。Ｆ12はやや不定形な球形を呈するもので、鉄砲玉の可能性が高い。Ｆ14～Ｆ17は断面が正方形或いは長方形を呈する釘の部分と考えられる。Ｆ13は縦断面がやや湾曲する不明な鉄片である。

時期

これらの鉄製品の時期については明確な遺構出土のものはなく、時期が不明と言わざるをえないが、検出された遺構の時期を考慮すると概ね中世の範疇に属するものと考えられる。



第65図　鉄製品

第5章　科学分析

第1節　放射性炭素年代測定

(1) ^{14}C年代測定値

試料の$^{14}C/^{12}C$比から単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は国際慣例に従って5568年を用いた。

(2) $\delta^{13}C$測定値

試料の測定$^{14}C/^{12}C$比を補正するための炭素安定同位体比（$^{13}C/^{12}C$）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

(3) 補正^{14}C年代値

$\delta^{13}C$測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、$^{14}C/^{12}C$の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

(4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代。較正には年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU－Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）および2σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種　類	前処理・調整	測　定　法
No.1	E地区SH7 床面	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄， ベンゼン合成	β線法 （液体シンチレーション）
No.2	D地区炭土坑1 炭層	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄， 石墨調整	AMS法
No.3	C地区窯跡 窯壁内面	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄， ベンゼン合成	β線法 （液体シンチレーション）

2．測定結果

試料名	^{14}C年代（年BP）	$\delta^{13}C$（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定No.
No.1	2120±60	−26.3	2100±60	交点：cal BC 110 1σ：cal BC 190 ～ 40 2σ：cal BC 360 ～ 290, ：cal BC 230 ～ AD 30	Beta−169574
No.2	690±30	−27.2	680±30	交点：cal AD 1300 1σ：cal AD 1290 ～ 1300, ：cal AD 1370 ～ 1380 2σ：cal AD 1280 ～ 1320, ：cal AD 1350 ～ 1390	IAA−11488
No.3	760±60	−26.4	730±60	交点：cal AD 1280 1σ：cal AD 1260 ～ 1300 2σ：cal AD 1200 ～ 1320, ：cal AD 1350 ～ 1390	Beta−169575

調査員所見　今回試料分析したものは3点あり、試料No.1は弥生時代中期末～後期初頭と考えられる竪穴住居跡（SH7）から出土した炭化材である。分析結果は2100±60（BC110）で予想より若干古いものの、ほぼ妥当な結果である。試料No.2はD地区炭土坑1出土の炭であり、予想した時期は鎌倉時代で、その年代は1200～1300ADであった。結果は680±30（AD1270）であり、ほぼ予想どおりの年代である。試料No.3はC地区窯跡窯体に密着していた炭化物であり、予想した時期は鎌倉時代で、その年代は1200～1300ADであった。結果は760±60（AD1190）であり、ほぼ予想範囲内の年代である。

第6章　まとめ

第1節　中津原遺跡の遺構について

(1) 竪穴住居跡

今回の調査で11棟の竪穴住居跡を検出した。以下に、若干の整理をしてまとめとしたい。

立地　今回の調査範囲は、B～D地区については南北に細長い調査区で、調査区南端は東西方向の尾根、その間の調査区中央は谷地形となっている。また、A・E・F地区は前述の地形のうち南側の尾根上に位置する。住居跡群は立地から、南側尾根上のA・E地区及びD地区南半と北側尾根上のC地区北半とに大きく二つのまとまりに分けることができる。掘立柱建物跡が谷地形にのみ立地することと対照的である。

特徴　今回調査した中津原遺跡の住居跡は、弥生時代後期前半という短期間に限定されたものである。また、住居跡の屋内施設についても、①床面中央が遺存するもの全てが中央土坑を持ち、いずれも土坑内に炭化物が充満している、②主柱穴の深度は、床面から50～70cmと一様に深い、③いずれも周壁溝がめぐる、といった特徴を指摘できる。

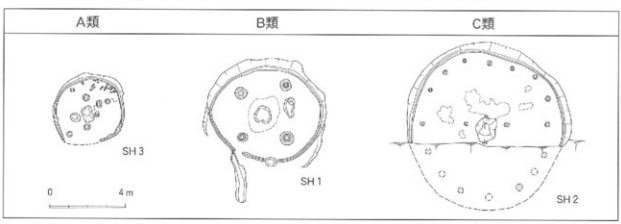
分類　上記のような特徴を持つ中津原遺跡の住居跡であるが、規模についても大きく3種類に分類できる。以下、規模の大きい順にA類～C類とする。

A類　規模は直径4m未満、主柱は2本。床面積12㎡以下の小型住居跡である。SH3が該当する。今回の調査で唯一切り合い関係が認められたのがSH3で、時期的な特徴を示す可能性がある。

B類　規模は直径6m前後、主柱は4本。床面積30㎡前後の標準的な住居跡である。中津原遺跡の住居跡の大半が該当する。排水溝を持つもの、周壁溝内に杭跡を持つものなどがある。

C類　規模は直径8m以上、主柱は8本。床面積50㎡以上の大型住居跡である。主柱間に補助柱を持つもの、排水溝を持つものなどがある。

大森谷遺跡　中津原遺跡の約500m南西に位置する大森谷遺跡は、本遺跡と同様に丘陵上に立地する弥生時代中期末から後期の遺跡で、本遺跡と同時期に集落が機能していた点で参考になる。7棟の住居跡が検出されている。本遺跡と同様に、A類～C類に分類可能だが、C類については主柱が4本である。また、B・C類については、全て排水溝を持つといった特徴がある。中津原遺跡の住居跡については、



第66図　竪穴住居跡の類型

大森谷遺跡よりも遺存状況が悪く、斜面下方の谷間が水田造成時に大きく削平され、床面が完存しない。本来的には、同様にB・C類全てに排水溝が付随していた可能性が考えられる。

第4表　竪穴住居跡一覧表

番号	地区	形状	規模(m)	主柱穴(本)	標高(m)	分類	備考
SH1	D地区	楕円	(径6.4×5.6	4	81.5	B類	排水溝
SH2	D地区	円	径8.9	8（4）	82.2	C類	主柱間に補助柱
SH3	D地区	円	径3.8	2	81.8	A類	焼失住居
SH4	D地区	円	径6.5	4	80.9	B類	
SH5	D地区	隅丸方	辺6.5	4（2）	79.6	B類	
SH6	E地区	円	(径5.5)	4（2）	78.5	B類	
SH7	E地区	円	(径6.0)	4（2）	77.5	B類	焼失住居
SH8	C地区	円	径10.4	8（4）	76.1	C類	排水溝
SH9	C地区	円	(径4.5)	4	76.1	B類	周壁溝内柱列
SH10	A地区	隅丸方	辺4.8	−	68.0	B類	
SH11	D地区	円	(径8.5)	8（4）	82.8	C類	周壁溝は削平

註：規模の（　）は復元径、主柱穴の（　）は実際に検出された数、標高は床面の高さ

小結　A類については、切り合い関係から、中津原遺跡の住居跡の最古段階、つまり集落の開始段階の特徴を示す可能性も考えられる。

上記のように、中津原遺跡の竪穴住居跡は、短期間限りのもので、屋内施設・規模についても規格性が認められることが特徴である。また、1例を除き切り合い関係は認められない。このことは、計画性をもって、短期間で集中的に低地から丘陵上へ人口が移動し、集落が形成されたことを端的に示している。

(2) 炭焼施設

今回の調査で炭土坑と窯跡の2種類の炭焼施設を検出した。いずれも鎌倉時代のものである。

炭土坑　D地区で2基検出した。平面形は長方形で、土坑内には径1～2cmの炭片が充満していた。底部は部分的に熱のため赤変していた。短辺側に突出部を持つ。突出部は土坑底部から緩やかに立ち上がることから煙出しの煙道になるものと考えられる。今回の炭土坑は、地面を掘り窪め薪を積んでから柴や土砂を被せて蒸し焼きを行ったいわゆる「伏せ焼き窯」跡になるものと考えられる。

特徴　いずれも竪穴住居跡と切り合いが認められる。このことは、炭土坑を構築するにあたって、弥生時代の竪穴住居が廃絶してその後の土砂流入で窪地状となった埋没住居跡の平坦面を利用して炭土坑を構築した事に他ならない。前述の大森谷遺跡でも、同様に埋没住居跡の平坦面を利用して炭土坑を構築している。

窯跡　C地区北東端で検出した。焚口は残存しないが、燃焼室については遺存状況が良く、奥壁付近では天井部が一部残存しており、また煙道がほぼ完全に残っていた。地山を大きく掘り込む地下式構造で、床面及び窯壁には5cm前後の厚さの粘土を貼り付け、燃焼で黄褐色に還元していた。構造的な特徴から、炭窯跡であると判断される。

黒炭と白炭　黒炭は柔らかい広葉樹を原木にし、400～600℃で炭化したもので、窯体を密閉して蒸し焼き状態で白煙消火させて製造する。着火しやすく鍛冶などに使われる。一方、白炭は硬木を原木にし、1,000℃以上の高温で炭化したもので、窯体外に炭材を掻き出し、灰など消し粉で消火して製造する。この消し粉が付着した状態から白炭という。火持ちが良く暖房などに使われる。

今回調査した炭土坑は、残存する炭材が広葉樹であること及びその構造から、黒炭用の炭窯跡と考えられる。一方、窯跡は高温で焼成されており、窯体内に全く遺物を残さない、焚口前面に作業場的空間を持つといった点から白炭用の炭窯跡と考えられる。

小結　鎌倉時代の黒炭窯跡と白炭窯跡を検出した。同時期に、同様の立地条件で2種類の窯を使い分けていたことになる。山間部における生業活動の一端を示す事例となろう。

第2節　洲本市周辺部における弥生集落立地の一考察

はじめに　中津原遺跡は標高83m～57mの南東向きの高所に位置する遺跡である。最高所からは、はるか南東方向に紀淡海峡を望むことのできる大変景色の良いところだが、平野部からは1kmも奥まったところに位置し、まるで平野部を避けるように生活していたと思わざるを得ない。また、遺跡の立地する高所の両サイドは、谷部まで切り立った崖面になっており、狭い谷間では農耕も極小規模なものであったであろう。中津原遺跡の弥生集落は、弥生時代中期末から後期前半に限定されて営まれた集落である。人口の増加に伴う分村化と耕地の拡大であれば、もっと継続性があっても良いように思われる。この様な所に居を構える要因が他にあるのだろうか。拠点集落である下内膳遺跡と周辺遺跡の在り方を見ながら探ってみたい。

下内膳遺跡　まず、洲本川流域における拠点集落である下内膳遺跡からみてみる。下内膳遺跡は平野を前面に望む標高12mほどの段丘上に位置する遺跡である。弥生時代前期後半に集落が営まれ、以後弥生時代中期全般にわたり営々と住み続ける。ところが、弥生時代中期後半に大規模な地震が発生し、さらに洪水による土砂に覆われ、弥生時代中期末から後期前半にかけて、一旦途切れる。弥生時代後期後半に集落が再び営まれるが、再度大規模な洪水砂が集落を覆い、後期終末期にはすべにまた集落を営み下内膳遺跡の全盛期を迎える。しかし、また大地震と洪水に襲われ、布留式期以後、下内膳遺跡は洪水の影響を受け難い安定した土地となっていく。

下内膳遺跡のこれまでの調査で、弥生時代中期後半と後期終末に2度の大地震があり、地震後あまり時間を経ずして、土石流が遺跡を襲っていることが明らかとなっている。このことを、この度の下内膳地区を対象としたほ場整備事業に伴う一連の遺跡調査により、多くの知見を得ているのでその成果も踏まえながら見ていきたい。

土石流の源流　まず、土石流の源流を探ってみる。下内膳遺跡の直ぐ北側を釈迦堂川が流れている。おそらく、この川が土石を運んだことは間違いない。ただ、釈迦堂川は、幅5mたらずの小河川で、一見して遺跡全体を覆うほどの大量の土砂を運ぶ河川には見えない。ところが、この度の、ほ場整備に伴う一連の調査で、まず、下内膳遺跡の直ぐ北側にあって、釈迦堂川の東に位置する蟇草池遺跡で弥生時代終末期の大規模な洪水砂が確認された。そして、釈迦堂川を挟んで、川の西側、蟇草池遺跡のやや上流にある西の森遺跡からも、弥生時代後期前半の遺跡を覆う洪水砂が確認された。さらに、西の森遺跡の直ぐ北に位置する釈迦堂川の東側、先山ニュータウン西側の谷部一帯から、3m以上の土石流の厚い堆積が見られ、その堆積土中に2層の弥生時代後期前半の遺物包含層が確認された。これらの包含層は、あまり土壌化しておらず二次堆積と思われるが、少なくとも弥生時代後期前半以後に大規模な土石流がこの谷を襲ったことが明らかとなった。中津原遺跡はこの谷の少し奥部、谷を見下ろすような標高70m前後の丘陵上に位置する。釈迦堂川の源流となるこの谷は、更に先山の奥深くにまで切れ込むように入り込んでおり、谷の奥深くに行くに従いV字の谷は深く狭くなる。

さて、このように見てくると、下内膳遺跡を数度となく襲った洪水と洪水によって運ばれた土石流は、下内膳遺跡の上流に位置する遺跡をも襲ったことが明らかとなった。そして、この土砂の堆積は、上流ほど厚く、また堆積土に含まれる礫の大きさも上流に行くほどに大きくなる。

このことは、土石流の源流が、釈迦堂川の源となる先山の深い谷であったとことを推測させる。

地震と洪水　さて、次に地震と洪水との関係である。地震により地盤がゆるむ。地震による谷部における斜面崩壊もあったろう。地盤のゆるんだところに洪水をもたらすような大雨が降ると、土砂崩れが起こる。先山の深い谷で、大規模な土砂崩れが起こると、谷部を埋めてしまい、自然のダムができる。自然のダムに水が満たされいずれ決壊する。そして、一気に水が流れ出し、崩壊した土砂と共に土石流となり後は雪だるま式に土石を巻き込みながら大規模な土石流が谷に沿い、蛇行しながら周辺を埋め尽くしていく。これが、下内膳遺跡とその上流にある遺跡が土石流、洪水砂に覆い尽くされたメカニズムである。地震でゆるんだ不安定な地盤は、安定するまで、年月がかかったであろう。

立地の変遷　さて、弥生時代中期後半（Ⅲ期末ないしⅣ期前半）に起こった大地震と地震以後の大雨により、下内膳遺跡は土石流に覆いつくされた。そこに住み着いていた人たちはこれまでの居住地を離れ、土石流の影響を受け難いところを居住地として選んだのだろう。それが、森遺跡、大森谷遺跡、そして中津原遺跡を始めとする先山山麓丘陵上の遺跡群である。一部の人たちは、これまでの居住地を離れずに住もうとしたが、それも、釈迦堂川から離れた所を選んで居住地とした。

森遺跡は弥生時代中期終末、大森谷遺跡は弥生時代後期前半、中津原遺跡も弥生時代後期前半の遺跡である。丁度、下内膳遺跡の断絶した時期である。これら丘陵上に住んだ人たちは、弥生時代後期前半の一時期であるが、しばらくはその地を離れなかったのは、恐らくこの時期、雨の多い不安定な気象条件が続いたためと、災害による社会不安が払拭されなかったためではないだろうか。

弥生時代後期後半になると先山山麓の丘陵上の人々は再び、丘陵から平野へと降りてくる。そして、平野部で耕地の開拓を進めるが、弥生時代後期終末期に再び大地震が発生し、土石流が遺跡を覆ってしまう。この時の洪水災害によるダメージは、弥生時代中期後半と同じようなものであったと思われるが、すぐに、同じ位置で居住し、また、洪水に襲われるといったことを繰り返している。この時期の竪穴住居跡が中津原遺跡で確認されている。また、大森谷遺跡でも同期の遺物が出土している。しかし、丘陵上の遺跡では継続性がない。ごく限られた時期のものである。一時的な避難であったのだろうか。

まとめ　丘陵上、高地における弥生遺跡の動向は淡路島では、弥生時代中期末に始まり、後期前半期と後期終末期に集中する。これは、これまで倭国大乱にからめて説明されることが多かった。しかし、このようにみてくると地震とそれ以後の洪水災害が不安定な社会情勢を作り上げ、争乱の元になっていたと考えてもあながち間違いではないような気がする。

第3節　中津原遺跡の考察

今回の発掘調査の結果、以下のような成果と意義があげられる。

立地と発掘例　遺跡は洲本平野北東部にそびえる先山から南西方向に舌状に張り出す丘陵上の標高およそ57～83mに立地する。この先山の南方に張り出す丘陵上には淡路縦貫道の建設に先立ち発掘された遺跡が存在する。大森谷遺跡、森遺跡、寺中遺跡など弥生時代中期後半あるいは後期前半ごろにはじまる集落である。

遺跡の時期　検出された遺構は当地の山間地の遺跡でみられるような弥生時代の住居や建物などで構成されている。弥生土器については他地域からの搬入や影響を受けた土器が若干みられるものの、在地産と考えられる土器が大多数をしめる。

遺構出土の土器からみるとSH7からの出土土器は弥生時代中期末（Ⅳ－3期）から始まり後期初頭（Ⅴ－0・1期）までであり、少なくとも中期末ごろには集落が作られたことが伺える。遺構や包含層からの出土遺物をみると後期初頭から前半ごろにかけての土器が大多数を占めることから、この時期に集落の規模はピークを迎えたことが分かる。後期後半ごろの土器も若干混じるところから、小規模ながらも存続していたことが推測される。

一方弥生時代の後は中世に再度生産の場として利用される。弥生時代と中世に生活や生産の場として活用されるのは大森谷遺跡や森遺跡にもみられる。

集落景観　今回の発掘面積は4,500㎡であるが、遺構としては弥生時代の竪穴住居跡11棟、掘立柱建物跡3棟は決して多いものではないが、全体図をご覧いただくと分かるように、ほ場整備により掘削される区域のみの発掘であり、未発掘区が各地区の間に入る。また住居跡の形態差などについては第6章第1節の報文に詳しい。

遺構の配置をみると竪穴住居跡は2～3グループに分かれることが分かる。第1グループはD地区南寄りとE地区に7棟が集まる。第2グループはC地区北寄りに2棟。第3グループはA地区中央から東寄りの地域である。特に第3グループは1棟のみの発掘例であるため、グループを構成するかどうかは少々困惑したが、この遺跡では竪穴住居跡周辺に遺物が集中することからF地区中央部からまとまって弥生土器が出土したことは、すぐ西側に位置する付近、つまりA地区から東側付近の赤褐邸付近に住居跡がまとまっていることが予想される。なお竪穴住居跡が集まる箇所は居住条件が良好な場所であり、谷部を避けている。竪穴住居跡のグループのある以外の場所では掘立柱建物跡や段状遺構が存在する。僅かではあるが凹地を呈する箇所にこれらの遺構が存在する。

なお竪穴住居跡が重複して検出されたのはD地区のSH2とSH3のみである。SH3が先行して建てられ、この住居を埋めてSH2が建てられる。

遺構出土土器を観察すると、これらは一様に弥生時代後期初頭の土器様相が伺えることから、比較的早くからこのグループが存在していたことが分かる。集落の合間からは東方に紀淡海峡が見え隠れする状況だったと考えられる。

中世の遺構はF地区で掘立柱建物跡、C地区で窯跡、D地区で炭土坑が検出された。F地区の掘立柱建物跡からの出土遺物は少なかったものの、C地区を中心に検出した窯跡や柱穴などからの出土遺物は13世紀ごろであり、この時期と大差ないものである。窯跡は土器を焼成した状況はうかがえないことや民俗例から炭焼窯と考えられ、炭土坑も炭焼き施設の一種であろう。F地区の掘立柱建

物跡は炭焼き操業に関連する施設である可能性が高い。

出土遺物　出土遺物には弥生時代の弥生土器、石製品、鉄製品があり、中世には須恵器、瓦器、土師器、鉄製品がある。

弥生土器は中期後半の(Ⅳ－3期)が最も古く、多くは後期初頭から前半(Ⅴ－0～3期)が主体を占める。後期後半も若干存在するが、弥生時代後期末までは続かなかった。弥生土器には他地域の影響を受けたものもあり、その中では中部瀬戸内地域の影響が見られるものが多く、僅かに河内地域の胎土である可能性が高い土器も見られる。

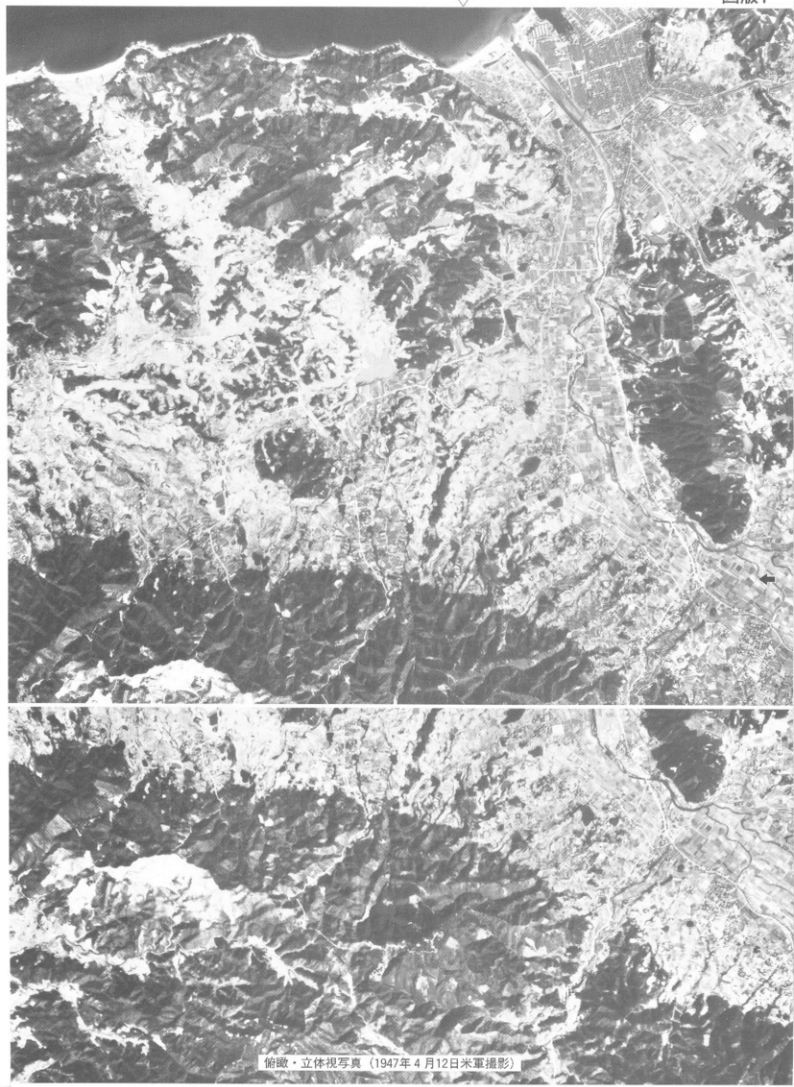
石製品としてはS2の緑泥片岩製石包丁があるが、淡路島中南部では類例が少ない遺物である。S3は結晶片岩製の敲石であるが、両端に敲打痕が明瞭に見られるほか、側縁にも敲打痕跡と考えられるくぼみが認められる。このような敲打具の小型品は石器製作具として各時期に見られるものであるが、それより大型で側縁にくぼみのある例については愛媛県明穂遺跡群などで見られる。これらは中津原遺跡例同様の結晶片岩製である。この石器については木製の柄が装着された石鎚と考えられる。

時期と性格　今回の発掘は周辺地域に遺跡が存在することを示し、当地域においても津名郡と同様に弥生後期において爆発的な遺跡増加傾向がみられる可能性を秘めている。

中津原遺跡周辺の弥生時代後期における遺跡の増加は各種の要因があるが、洲本川流域の水田開発が進み、生産性の向上によって人口が増加したこと。第6章第2節で詳細に論考しているが、下内膳遺跡等でみられる弥生時代後期ごろの土石流による自然災害の発生によって、より安全な山間地に新たな居住地を求めた結果と考えられる。

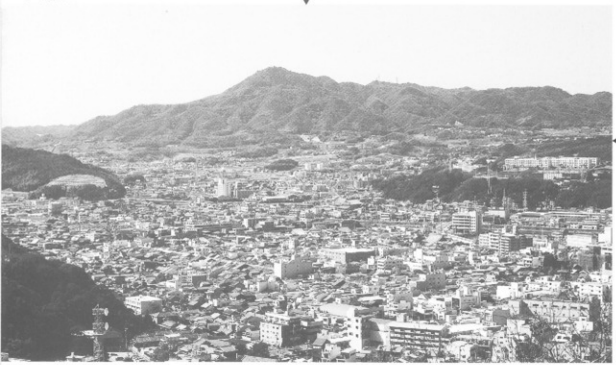
写真図版

洲本市立加茂小学校　弥生人体験

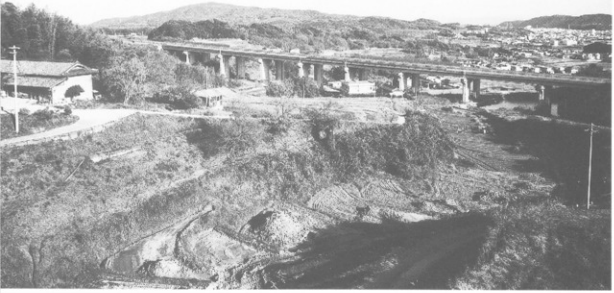


俯瞰・立体視写真（1947年４月12日米軍撮影）

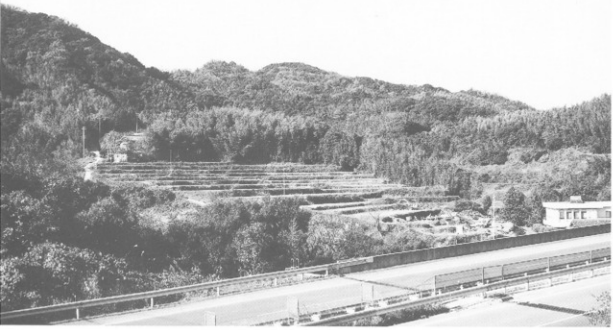
図版2



遺跡遠景
（洲本城跡から）



遺跡全景
（西から）



遺跡全景
（南東から）

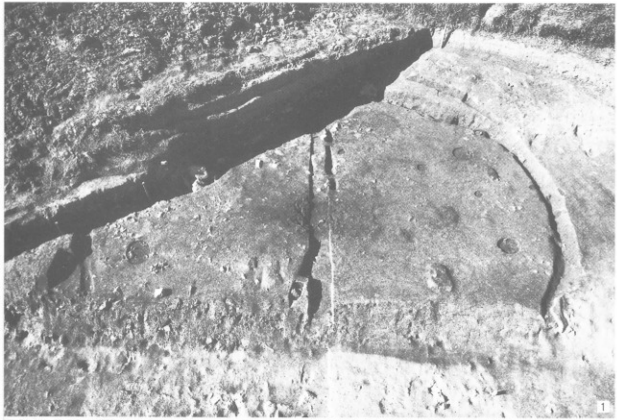
1．A-1地区全景
（北から）

2．A地区SH10
（東から）

3．B地区段状遺構4
（南東から）

4．B地区P403
土器出土状況

図版4　C地区

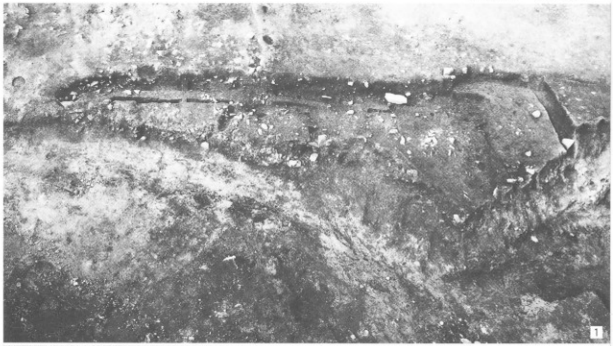


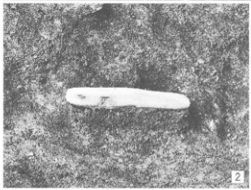
1．C地区SH8
（南東から）

2．C地区SH9
（南東から）

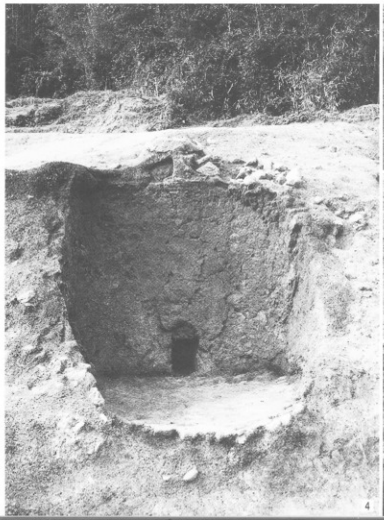
3．C地区SB3
（東から）

4．C地区SB2
（東から）



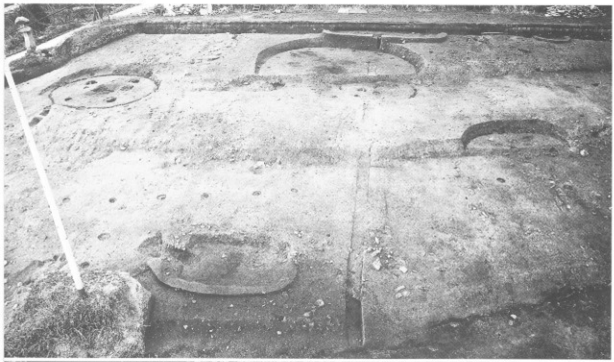


1．C地区段状遺構3
（南から）
2．C地区段状遺構3
棒状石製品出土状況
3．C地区段状遺構3
台石出土状況

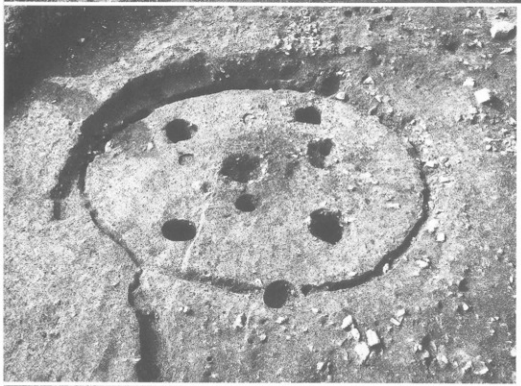


4．C地区窯跡
（東から）
5．C地区窯跡
検出状況
6．C地区窯跡
煙道排煙口
7．C地区窯跡
煙道吸入口

図版6　D地区

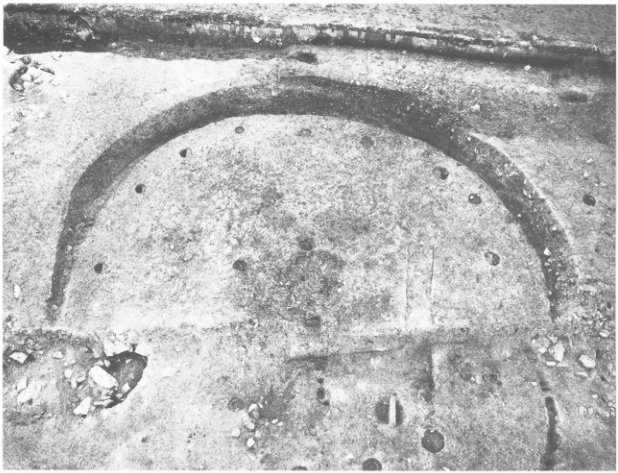


1．D地区南半全景
（東から）

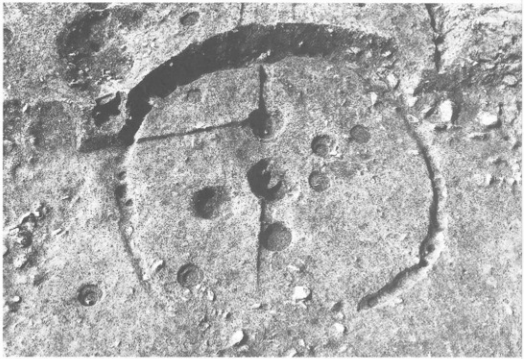


2．D地区SH1
（東から）

3．D地区SH4
（東から）



1．D地区SH2
（東から）



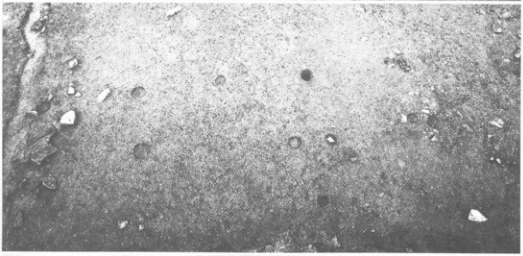
2．D地区SH3
（東から）

3．D地区SH5
（東から）

図版8　D地区

1．D地区全景
（北から）

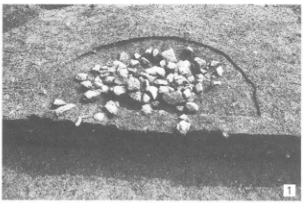
2．D地区段状遺構1
（南東から）



3．D地区SB1
（東から）

1．D地区SX2検出状況
（西から）

2．D地区SX2完掘状況
（西から）


1

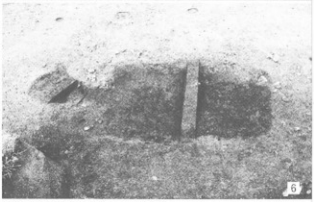
2

3

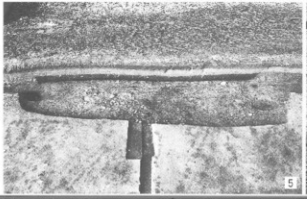
3．D地区ST1
（東から）

4

4．D地区炭土坑1
炭検出状況（南から）


6

5．D地区炭土坑1
完掘状況（東から）


5

6．D地区炭土坑2
炭検出状況（東から）

7

7．D地区炭土坑2
完掘状況（東から）

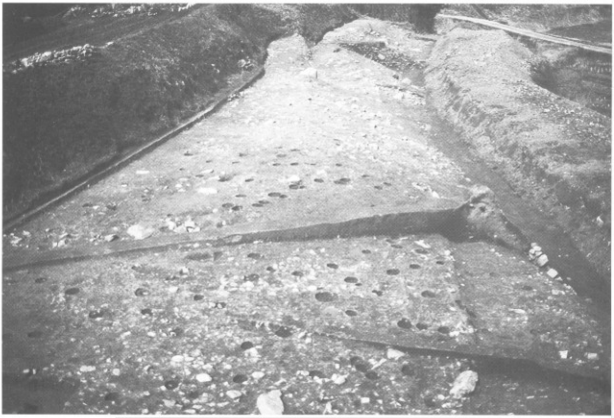
図版10　E地区

1．E地区全景
（東から）

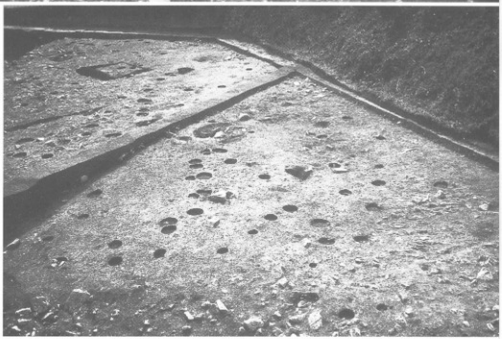
2．E地区SH6（東から）

3．E地区SH7
炭化材検出状況
（東から）

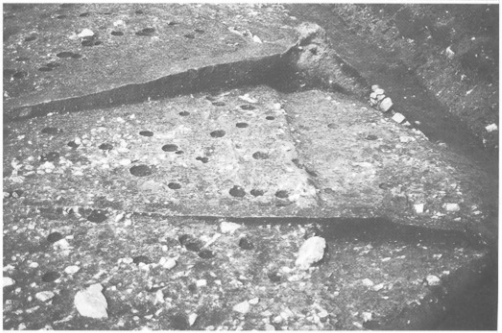
4．E地区SH7
土器出土状況



1．F地区全景
（南から）



2．F地区SB4
（北東から）



3．F地区SB5
（南から）

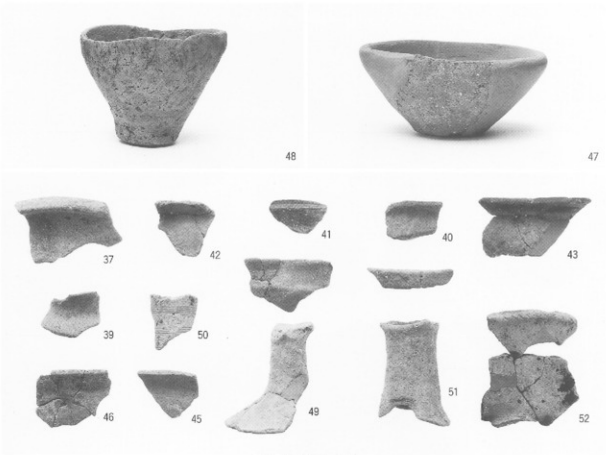
図版12　F地区

1．F地区北半部全景
（北から）

2．F地区遺物包含層
セクション
（東から）

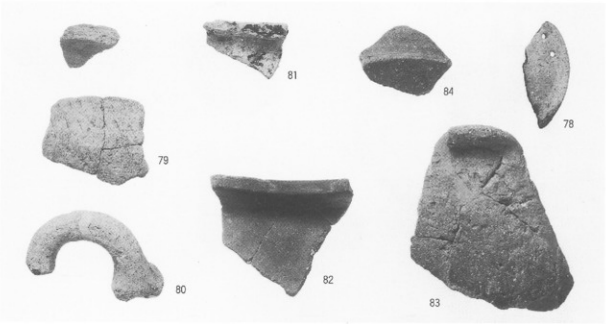
3．F地区遺物包含層
土器出土状況

B地区出土土器

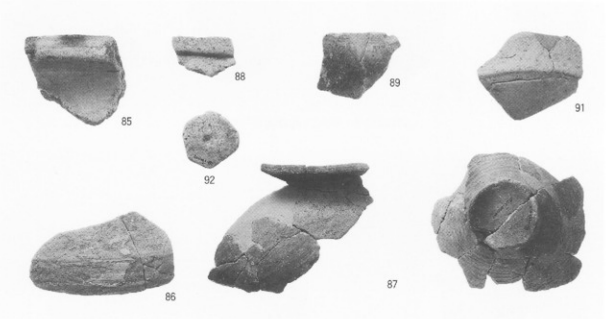


C地区SH8出土土器

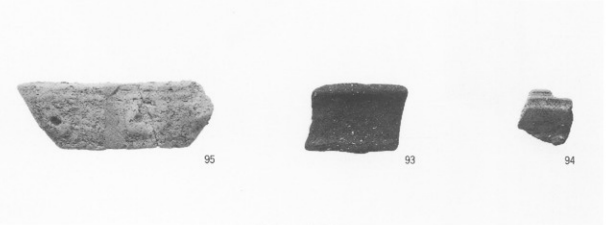
C地区出土土器



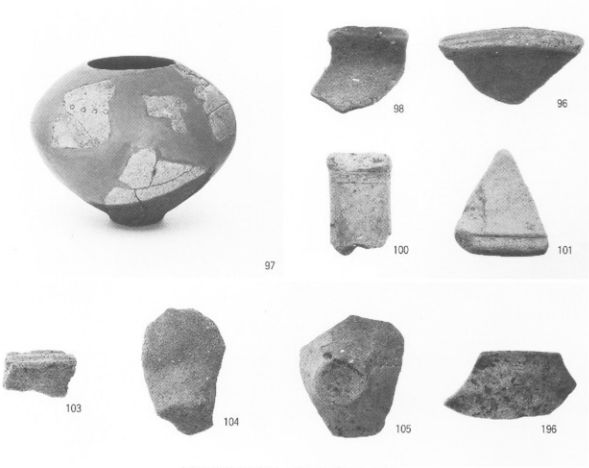
D地区SH1出土土器



D地区SH2出土土器



D地区SH4出土土器

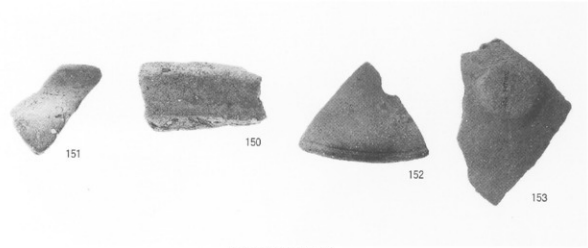


D地区SH5・SH11・段状遺構1出土土器

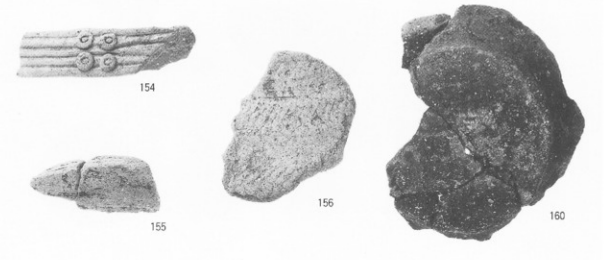
D地区ST1出土土器

117
129
128
125
113
116
121
122
127
142
135
146
111
110
138
140
131
130

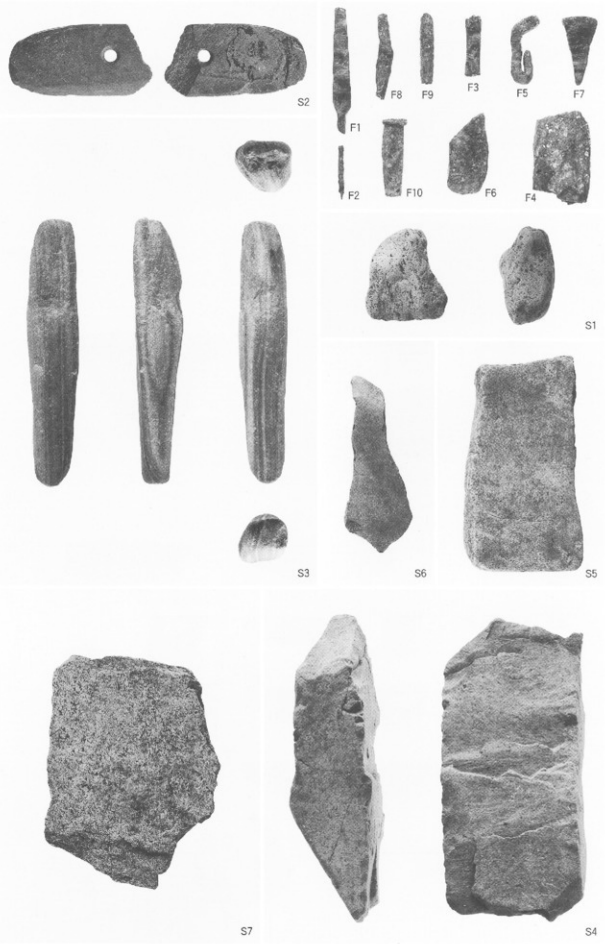
D地区包含層出土土器



E地区SH6出土土器



E地区SH7出土土器



A～E地区石製品・鉄製品

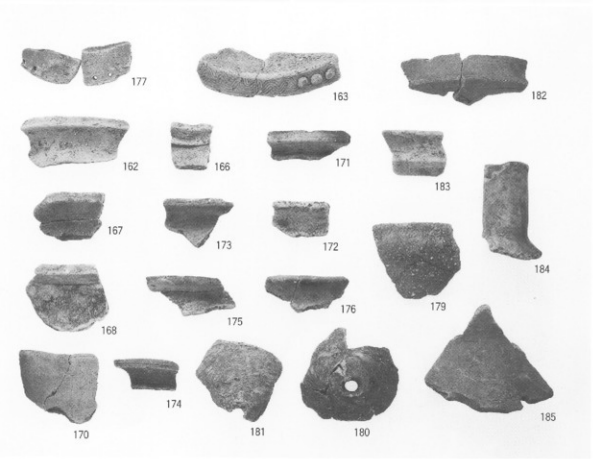
161

169

164

165

178



F地区出土土器

報告書抄録

ふりがな	なかつはらいせき
書名	中津原遺跡
副書名	基盤整備促進事業(一般型)下内膳地区埋蔵文化財調査報告
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告　　洲本市文化財調査報告
シリーズ番号	第261冊　　第10冊
編著者名	吉田　昇、深井明比古、服部　寛、尾野幸雄、浦上雅史 株式会社 古環境研究所
編集機関	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所 洲本市教育委員会
所在地	〒652-0032　兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号　TEL 078-531-7011 〒656-8686　兵庫県洲本市本町3丁目4番10号
発行年月日	西暦2003年(平成15年) 3月20日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかつはらいせき 中津原遺跡	ひょうごけんすもとし 兵庫県洲本市 しもないぜん 下内膳	28686	93002	34度32分11秒	134度59分26秒	2000.10.26 ～ 2001.3.15	112㎡	基盤整備促進事業(一般型) 下内膳地区
						2001.12.13 ～ 2002.1.10	394㎡	
						2002.1.21 ～ 3.25	3,263㎡	
						2002.1.28 ～ 3.25	740㎡	

遺跡調査番号	所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
2001150 2001200	中津原遺跡	弥生：集落	弥生時代後期	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、段状遺構、土坑、溝	土器、石器、鉄製品	弥生時代後期前半の集落遺跡。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、土坑、土器棺などを検出。中世は掘立柱建物跡、窯跡、皮土坑を検出。 遺物は弥生土器、石器、鉄製品など、28リットル入りコンテナ50箱。 弥生時代後期ごろに爆発的に増加する集落の意味を考える。
		中世：生産跡	鎌倉時代	掘立柱建物跡、窯跡、炭土坑	須恵器、土師器、瓦器、鉄製品	

兵庫県文化財調査報告　第261冊
洲本市文化財調査報告　第10冊

中津原遺跡

—基盤整備促進事業(一般型)下内膳地区埋蔵文化財調査報告—

2003年(平成15年)3月31日　発行

発行　兵庫県教育委員会
〒650-0011　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
TEL 078-341-7711

洲本市教育委員会
〒656-8686　兵庫県洲本市本町3丁目4番10号
TEL 0799-22-3321

編集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL 078-531-7011

洲本市教育委員会
〒656-8686　兵庫県洲本市本町3丁目4番10号
TEL 0799-22-3321

印刷　船場印刷株式会社
〒670-0994　兵庫県姫路市定元町4－2
TEL 0792-96-3535

竪穴住居跡1